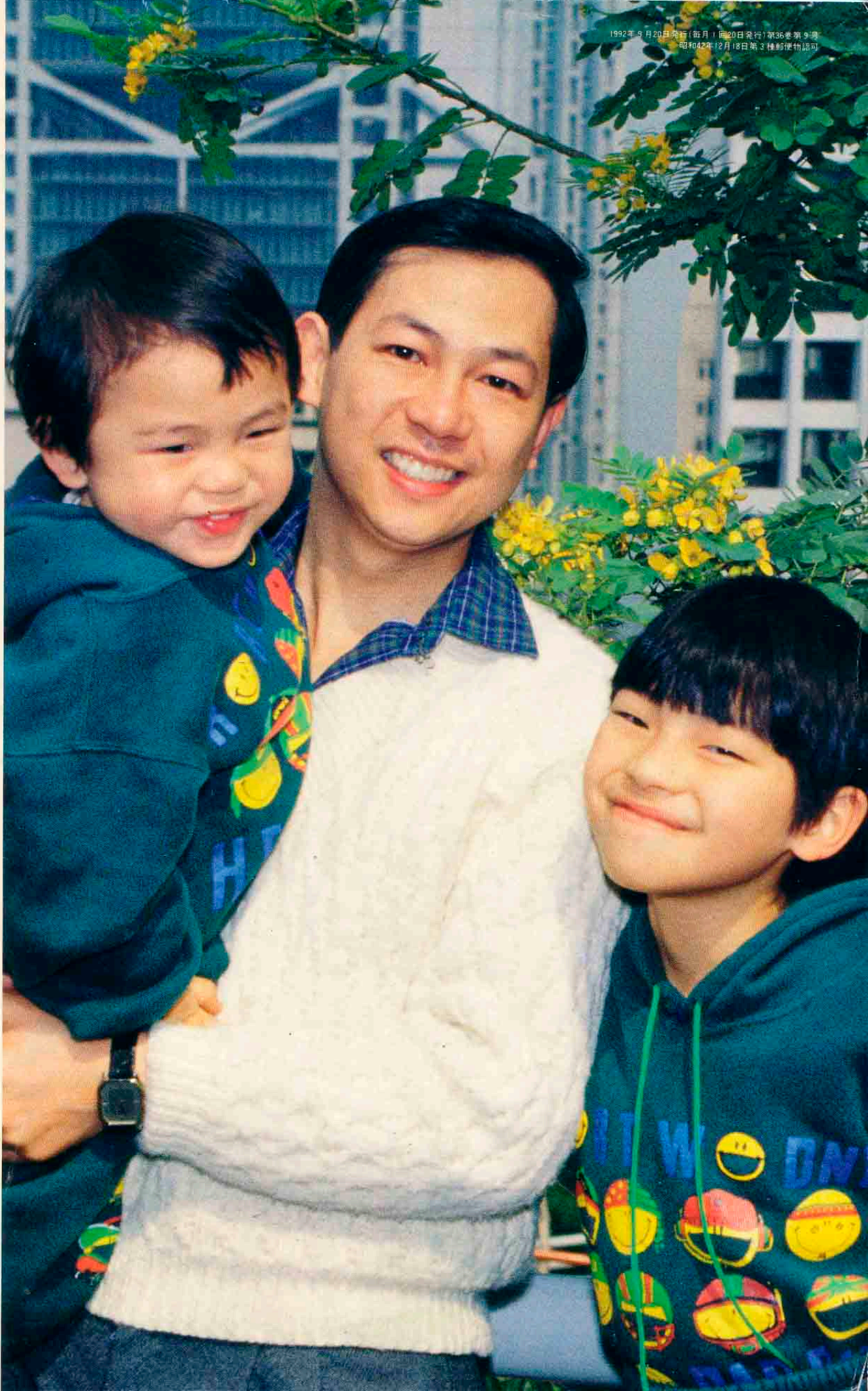


聖徒の道

9
1992



末日聖徒
イエス・キリスト
教会

聖徒の道

1992年9月号



表紙——香港では古い時代の知恵と、現代のテクノロジーと、目をみはる自然美が、混然一体となっている。その中にあるまことの真珠の輝きを放つのは、そこに住む人々である。(本誌「東洋の真珠」p. 34参照。写真撮影リーサ・バーグ)

こどものページ表紙——「家庭のタペ」アクリル、ユタ州ミッドベール在住のウィリアム・J・パーキンソン作。ユタ州ソルトレークシティにある教会歴史美術館主催の第1回国際美術コンテスト入賞作品。

一般

大管長会メッセージ——長い孤独の境遇

第二副管長トーマス・S・モンソン	2
祈りに導かれて レジー・R・バン・ワゴナー	8
大水、風、地獄の門 アーサー・R・バセット	26
東洋の真珠 ケリー・リックス	34

青少年

モルモンメッセージ——行き先は同じですか	13
3人のニュージーランド人 ジャネット・トーマス	14
まだ私の最期ではない カロス・ホセ・ガルシア	20
人に影響を与える ジェリー・クリステンセン	46

定期特別記事

読者からの便り	1
質疑応答——なぜ私たちはすべての国に福音を伝えていないのですか	
ダニエル・H・ラドロ	22
家庭訪問メッセージ——家庭を築く	25

こども

ジョセフ・F・スミス ケリー・リックス	2
あいする子どもたちへ	
中おうしよとうきょう会会長会からのメッセージ	4
ちいさなみんなのために おそすぎる	
ジーン・N・バーゴン	6
プライマリーの天使 チャールズ・E・デービス	8
分かち合いの時間——わたしの家とその近じよ	
バージニア・ピアス	12
ペドロ・アヤラ・エスピノサ コーリス・クレイトン	14

聖徒の道

1992年9月号

本誌は、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。本誌は以下の言語で出版されています。月刊——イタリア語、英語、オランダ語、サモア語、スウェーデン語、スペイン語、中国語、韓国語、デンマーク語、ドイツ語、トンガ語、日本語、フィンランド語、フランス語、ポルトガル語、ノルウェー語。隔月刊——インドネシア語、タイ語、タヒチ語。季刊——アイスランド語。

大管長会：エズラ・タブ・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン
十二使徒定員会：ハワード・W・ハンター、ボイド・K・バックナー、マービン・J・アシュトン、L・トム・ペリー、デビッド・B・ヘイト、ジエームズ・E・ファウスト、ニール・A・マッククスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オクス、M・ラッセル・バラード、ジョセフ・B・ワースリン、リチャード・G・スコット

顧問：レックス・D・ピネガー、チャールズ・ディエ、ロバート・E・ウエルズ
編集長：レックス・D・ピネガー
教科課程管理部実務部長：ロナルド・L・ナイトン
教会機関誌ディレクター：トーマス・L・ピーターソン

国際機関誌

編集主幹：ブライアン・K・ケリー
編集主幹補佐：マービン・K・ガードナー
編集副主幹：デビッド・ミッチェル
編集補佐/こどものページ：ディエーン・ウオーカー
チーフアートディレクター：M・マサト・カワサキ
アートディレクター：スコット・D・バン・カンペン
デザイナー：シェリー・クック
制作：レジナルド・J・クリステンセン、ステイブ・デイトン、ジェーン・アン・ケンプ、デニス・カービー

工程管理：ダイアナ・パンスタブレ
配送部長：ジョイス・ハンセン
聖徒の道 1992年9月号第36巻第9号
発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
〒106 東京都港区南麻布5-10-30
電話 03-3440-2351
印刷所 株式会社 精興社/クロスロード
定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)
半年予約 1,100円(送料共)
普通号 150円、大会号 350円

International Magazine September 1992 ITEM 92989 300
Printed in Tokyo, Japan.
Copyright © 1992 by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved. Translated into Japanese 1992.

●定期購読は、「聖徒の道」申し込み用紙(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 振替口座番号/東京0-41512)にて管理本部経理課へご送金いただければ、直接郵送いたします。●「聖徒の道」のお申し込み先…〒106 東京都港区南麻布5-10-30 管理本部経理課 ☎03-3440-2351(代表) ●「聖徒の道」の配送についてのお問い合わせ…〒213 川崎市高津区溝の口131/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター ☎044-811-0417

The Seito No Michi (ISSN 0385-7670) is published monthly by The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, 50 East North Temple, Salt Lake City, Utah 84150. Second-class postage paid at Salt Lake City, UT 84150. Subscription price \$14.00 a year, \$1.50 per single copy. Thirty days' notice required for change of address. When ordering a change, include address label from a recent issue; changes cannot be made unless both the old address and the new are included. Send U.S.A. and Canadian subscriptions and queries to Church Magazines, 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A. Subscription information telephone number 801-240-2947.

POSTMASTER: Send address changes to Seito No Michi at 50 East North Temple Street, Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.

読者からの便り

現代の塔

「リアホナ」(スペイン語版)は私にベンジャミン王を思い出させます。王は民に天父のみこころを知らせるため、塔の上に立ちました。(モーサヤ2:8参照)

今日、主の予言者は教会機関誌を含む様々な「現代の塔」を通じて聖徒たちに語りかけています。私たちは母国語で教会機関誌を読み、神のみ言葉を研究し、味わうことができるので、祝福されていると思います。

ホンジュラス・ラリマステーキ部

ラリマワード部

ラウル・エドガルド・カルカモ・J

最も美しい経験

長い間ためらってききましたが、今、私は「デア・シュテルン」(ドイツ語版)のすばらしい記事に感謝するため、筆を執るべきだと感じました。1990年10月の総大会におけるデビッド・B・ヘイト長老の説教『神殿と神殿の業』(「聖徒の道」1991年1月号, pp. 62-64)によって、私は生涯における最も美しい経験のひとつに導かれたからです。

1991年2月に私はバプテスマを受け、大会特集号である1991年1月号を手にしました。ヘイト長老の説教を読んだ後、私はできるだけ早く神殿に行き、亡くなった母の身代わりのバプテスマを受けよう決心したのです。その後、母は私の夢枕に現われ、バプテスマを受ける準備はできていると言いました。

生涯忘れることのできない霊的な経験ができたことを、私は天父に永遠に感謝するでしょう。しかし、それも教

会の機関誌を読んだおかげなのです。
ドイツ・ノイミュンスターステーキ部
グルックシュタットワード部
エリカ・ギーセン

燃える思い

美しい装丁で届けられるすばらしい教会機関誌「リュース・オーベル・ノルゲ(ノルウェーの光の意)」(ノルウェー語版)に感謝しています。私は霊的に落ち込んでいるときに記事を読んで、イエス・キリストの福音に従って生きる燃えるような望みを与えられることがよくあります。

兵役に就いていた期間は特に感謝しました。末日聖徒の仲間がほかにいませんでしたが、記事を読んで霊が鼓舞され、喜びで涙を流すこともよくありました。

ノルウェー・オスロスステーキ部

モスワード部

テルヤ・ホーエル

編集室から

愛読者の皆様にご心よりお礼申し上げます。皆様からの手紙、記事、体験談などを募集しています。お便りは日本語でも結構です。(投稿の際は住所、氏名、所属ステーキ部/地方部名、ワード部/支部名を記入してください)これまでいただいたお便りに感謝するとともに、今後もさらに多くのお便りをお待ちしています。あて先は下記のとおりです。

International Magazines

50 East North Temple Street

Salt Lake City, Utah 84150, U.S.A.



長い孤独の境遇

第二副管長

トーマス・S・モンソン

聖書の中でもヤコブの手紙は、長い間人々に愛読されてきました。簡潔で心温まる生気に満ちた手紙です。「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせず^{なんじ}に惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。」(ヤコブ1：5)このよく知られた聖句はだれもが引用できるでしょう。しかし、私たちの中でどれだけの人が、ヤコブが説いている信仰の定義を覚えているのでしょうか。ヤコブは、「父なる神のみまえに清く汚れない信心とは、困っている孤児や、やもめを見舞い、自らは世の汚れに染まずに、身を清く保つことにほかならない」(ヤコブ1：27)と述べています。

「Widow」(やもめ)という言葉は、主にとって極めて重要な意味があったように思われます。長い衣を着け、長い祈りをして義人の振りをし、その実はやもめたちの家を食い倒している律法学者の例を挙げて、主は弟子たちに気をつけるようにと警告されています。(マルコ12：38、40参照)

ニーファイ人にも直接このように警告されています。「われは裁判をなすために汝らに近づき、……やもめ……をしいたげ……る者^{なんじ}とに対してきびしくまた速^{すみやか}に証を立つ……。」(IIIニーファイ24：5)

また予言者ジョセフ・スミスに対して、主はこのように命じておられます。「この倉庫は教会員の捧物^{ささげもの}によりて支えられ、寡婦孤児^{やもめみなしご}および貧者も同じくこれより給与を受くべし。」(教義と聖約83：6)

こうした教えはその当時に初めて与えられたものではありませんでした。それは今日でも同じです。イエス・キリストはご自身がやもめを気にかけておられたことを、模範によって一貫して教えておられます。ひとり息子を失って嘆き悲しんでいたナインのやもめに対して、キリストはみずから近寄って死んでいた息子の生命をよみがえらせ、驚くやもめにお渡しになりました。また息子とふたり、餓死を目前にしていたザレパテのやもめには、予言者エリヤを送って食物をお与えになり、さらに信仰についてもお教えになりました。

「でもそれは遠い昔の、はるかかなたの地でのことだ」と思う人がいるかもしれま

問題を抱えている人々に対してさらに熱心に助けの手を差し伸べるに当たり、その学びの場に子供たちも加える必要がある。

せん。そのような人に対して私はこうお尋ねしたいと
います。「あなたの家の近くにザレパテという町はあり
ませんか。ナインという町はありませんか」と。私たち
はコロンバスやコールビル、デトロイトやデンバーとい
った都市は知っているかもしれませんが。しかしその名前
が何であれ、どの町にも伴侶や、ときには子供を失った
やもめが住んでいるものです。そして同じように困って
います。現実に悩み悲しんでいるのです。

やもめの家というのは普通、大きくもなければ飾り立
ててもいません。大抵は大きさも見かけも質素な住まい
です。またアパートの階段を上りつめた部屋とか、廊下
の突き当たりの部屋に、彼らはひっそりと暮らしていま
す。それもたったひとりの部屋で。そのような家に、キ
リストは皆さんや私を遣わされるのです。

彼らは実際に食べ物や着る物がなくて困っているかも
しれません。住む家さえもままならないかもしれません。
そうした必要を満たしてあげられるのは私たちです。こ
のような人々はいつも、私たちの愛ある言葉や訪問を待
ちわびています。それは、春に咲く花々のように、喜び
をもたらし、心を満たしてくれるのです。

寂しく、孤独な人のもとを訪れよう。

涙に暮れ、疲れ果てている人を慰めよう。

そして、親切な行ないを道にまき、

きょう、世界をもっと明るくしよう。

(フランク・A・ブレック夫人)

特別な助けを必要とする人々は、日々その数を増して
います。新聞の死亡記事を見てください。そこには人生
のドラマが展開されています。死はだれにでも訪れます。
それは足下のおぼつかない老人のもとを訪れ、その招き
の声はまだ人生の半ばにも達しない人の耳に響き、そし
てしばしば、幼い子供たちの陽気な笑い声をかき消して
しまうのです。

ひつぎを飾った花が色あせ、友人たちの慰めの言葉が
思い出となり、捧げられた祈りや語られた言葉が心の中
から次第に消え去っていった後、この悲しみに打ちひし
がれた人々は、私が「長い孤独の境遇」と呼ぶ大勢の
人々の群れに加わります。失ったものは、幼い子供の笑
い声でしょうか。10代の子供のあの活気に満ちた姿でし
ょうか。それとも、あなたを残して逝った伴侶の、愛に
満ちたやさしい思いやりでしょうか。時を刻む時計の音
はことのほか大きく、時の過ぎるのはゆっくりで、壁に
囲まれた部屋は、まるで留置場のように思えてくるので

す。

願わくは、私たちすべてが救い主の次の言葉を再び胸
に響かせることができますように。「わたしの兄弟であ
るこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、
わたしにしたのである。」(マタイ25:40)

さて、問題を抱えている人々に対してさらに熱心に助
けの手を差し伸べるに当たり、この学びの場に子供たち
も加えましょう。

私も子供のころの思い出には事欠きませんが、日曜日
の夕食が待ち遠しくて仕方がなかったのもそのひとつで
す。死ぬほどおなかですいて家に帰ると、ローストビー
フの何とも言えない香りが家中に漂っています。急いで
食卓に着いて食事が出るのを待っていると、母親がよく
こう言ったものでした。「トミー、食べる前にひとつ走
りボブおじいさんのところに行って、これを届けてきて
くれない?」

私には、なぜ先に食事を済ませてから届けないのか、
まったくわかりませんでした。しかしそれを口に出して
言うことはせず、急いでボブおじいさんの家に駆けて行
きました。そして彼が弱った足でゆっくりと歩いて、ド
アの所に出て来るのをやきもきしながら待っていたもの
です。私が持って行った食事を手渡すと、ボブおじいさ
んは代わりに先週の日曜日に届けた食事の皿を返してく
れました。そして私に、届けてくれたお礼にと行って10
セントを差し出すのです。私の答えは決まってこうでし
た。「いいえ、受け取れません。お母さんにしかられま
すから。」するとボブはしわだらけの手で私のブロンド
の髪をなで、「いいお母さんだね。ありがとうって言っ
といておくれ」と言いました。

しかし、私は母には何も言いませんでした。ボブおじ
いさんの感謝の気持ちは何も言わなくても母にはちゃん
と伝わっていると思ったのです。もうひとつ私の心に残
っているのは、ボブおじいさんのところに行った後で食
べた日曜の夕食が、いつもより少しおいしかったことで
す。

このボブおじいさんは、ひよんなことから私たちの家
族と深くかかわりを持つようになりました。彼は奥さん
を亡くした後ひとりで暮らしていましたが、80歳を超え
たころに、借りていた家を取り壊されることになりました。
私は、ボブが祖父に窮状を説明するのを聞きました。
ポーチの前にあった古いブランコに3人で座っている時、
ボブおじいさんは祖父に、寂しげな声でこう言ったので
す。「コンディーさん、もうどうしようもないんですよ。
私は身寄りもないし、どこにも行く当てがない。先立つ



ものもありませんね。」

私は祖父がどう答えるのか見当が付きませんでした。祖父はゆっくりとポケットに手を入れて、革の財布を取り出しました。私がせがむと、いつも中から1セント硬貨や5セント硬貨を取り出して私にくれたあの財布でした。しかし今回は違いました。祖父は鍵を1本取り出して、それをボブの手に握らせ、やさしくこう言ったのです。「ボブ、これは隣にある私の家の鍵だ。使ってくれないか。自分の荷物をみんな持って来て好きなだけいいよ。家賃もいらないし、追い出す人もいないから。」

ボブおじいさんの目には涙があふれ、やがてそれはほほを伝って白いあごひげに落ちました。祖父の目もうるんでいました。私は何も言いませんでしたが、その時ほど祖父が偉大に見えたことはありませんでした。私は自分の名前がこの祖父の名を取ってつけられたことを誇りに思っています。私はその時まで子供でしたが、祖父のこの模範は、それ以来、私の人生に影響を及ぼしてきました。

私たち一人一人は、それぞれ自分だけの特別な思い出を持っています。監督をしていたころ、ワード部でクリスマスから新年にかけてひとり暮らしの老人のもとを訪れるのは大きな喜びでした。そのような人は今は8人しかいませんが、当時は87人もいました。そうした家々を訪れるときには、どのようなことが起こるのかまったく予測が付きませんでした。ひとつだけわかることがあ

私たちは、虐げられた人々の重荷を軽くし、寄り添えない者たちの心を慰めなければならない。

りました。それは、このような訪問によって、クリスマスの真の精神、すなわちキリストのみたまに満たされるということでした。

私と一緒に1、2軒訪問してみましょう。

数年前のことですが、ファーストサウス通りの老人ホームでプロフットボールのゲームを見たことがあります。部屋に入ると、美しい身なりをしたふたりのやさしそうな姉妹がテレビの前に座り、ゲームに熱中している様子でした。私は聞きました。「どっちが勝ってますか？」姉妹たちは答えました。「どこがやっているかもわからないんだけど、ふたりでこうしていると楽しいのよ。」そこで私はこのふたりの天使の間に座り、フットボールのゲームの解説をしました。その時のゲームほど面白いゲームはありませんでした。このため、ある集会に遅れそうになりましたが、貴重な思い出となりました。

続いてレッドウッドロードに行ってみましょう。未亡人がたくさん住んでいる大きな老人ホームがあるのです。行ってみると、明るい電灯の光に照らされた居間では、大勢の姉妹たちが談笑していました。でも、私たちが訪れる姉妹は、自分の寝室でひとり寂しく暮らしているのです。彼女は数年前に脳いっ血で倒れ、以来口が利けなくなりました。しかし、彼女がその耳を通して何を聞いているのか知っている人はいるのでしょうか。私は彼女と楽しかった思い出話をするにしました。私の話に一言も返事はなく、かすかな反応さえ見受けられませんでした。案の定、付き添いの人は、彼女が何年も一言も口を利かないでいることをご存じですか、と尋ねてきました。しかし、それは関係のないことです。私は彼女と一方通行の会話を楽しんだだけでなく、神とも交わることができたのです。

ウエストテンプルにも老人ホームがあり、未亡人が4人暮らしています。皆さんはそこに通じる細い道をまだ1度も通ったことがないでしょう。でも窓のカーテンのすき間からは、友の来訪を待ちわびている彼女たちの顔が見えました。なんという温かな歓迎でしょう。懐しい昔話に花が咲き、プレゼントが渡され、祝福が施されました。しかし時は過ぎ、別れの時間がやって来ました。しかし、もうすぐ100歳を迎えるというある姉妹の頼みにこたえないでは、とてもそのホームを後にすることはできませんでした。彼女は目が見えませんでした。よくこう言ったものでした。「監督、私のお葬式の時には必ず話をしてくださいよ。そしてアルフレッド・ロード・テニソンの詩、『生と死のとばりを越えて』を暗唱してくださいね。さあ、今やってみて。」こうして私は



ひつぎを飾った花が色あせ、友人たちの慰めの言葉が思
い出となった後、この悲しみに打ちひしがれた人々は、
大勢の孤独な人々の群れに加わる。

次の詩を吟じ始めました。

宵の明星があかね色の空に一筋の光を投げかけ
私を呼ぶ声が辺りにこだまする
このとばりのかなたに旅立つ私
そこには微塵の悲しみもない
暮れなずむ浜辺に鐘の音が響き
やがて漆黒の夜が訪れる
別れを告げる私
そこには寂しさはない
時と場所の境を越え
潮の流れに任せて船出する今
願うはこのとばりのかなたで
かの水先案内人のみ顔を拝さんことを

彼女の目は見る見る涙でいっぱいになりました。でも
すぐに笑顔になってこう言いました。「トミー、とても
よくできましたよ。でもお葬式の時にはもう少し上手に
できるわね。」彼女の頼みに応じなければならない日が
来たのは、それからしばらくしてからのことでした。

かつて、敬愛するキンボール大管長は貧しい人々を抱
えている国からの訪問者とお会いになりました。その時、
大管長の口を通して出た言葉は、単なる統計上の言葉で
はありませんでした。「皆さんの国の方々は食べる物は
十分ありますか。伴侶に先立たれた方々は十分な配慮を
受けていますか。」これが大管長の思いやりなのです。

ジョージ・アルバート・スミス大管長の時代のことで
すが、私たちのワード部に病弱な娘を3人も抱えた貧し
い未亡人の姉妹がいました。娘たちは、体は大きいので
すが何ひとつ自分ですることができません。この愛すべ
き女性は、娘たちの入浴から、食事、身づくろいまであ
らゆる世話をしなければなりません。その上財産
もなく、ほかに頼る人もいません。そして、そのような
彼女に追い打ちをかける事態が起きました。借りてい
た家が売りに出されたのです。どうすればよいのでしょ
う。彼女はどこへ行けばいいと言うのでしょうか。当時の
監督は教会本部に向いて、教会がその家を購入できな
いものかと尋ねました。非常に小さな家で、値段も手ご
ろでした。しかし、その申請は一応は考慮されたものの、
結局却下されました。気落ちした監督は、足よりも重く
教会本部の玄関を出ようとしたが、そこにちょうど
ジョージ・アルバート・スミス大管長が通りかかりまし
た。あいさつを交わした後で、スミス大管長がこう尋ね
ました。「どういったご用で教会本部にいらっしゃった

のですか。」大管長は監督の説明を一つ一つ注意深く聞
くと、何も言わず、「すぐ戻ります」と言ってその場を
離れました。しばらくして、大管長は満面に笑みをたた
えて戻って来ました。そしてこう言ったのです。「4階
に行ってください。小切手ができています。すぐに家
を買ってください。」

「でも申請は却下されたはずですが。」

その言葉に、スミス大管長はもう一度にっこりしてこ
う言いました。「ちょうど今再検討されて承認されたの
です。」こうして家は購入され、そのすばらしい未亡人
の姉妹は3人の娘が全員亡くなるまで世話をし続け、や
がて彼女も天の報いの待つ神の家に旅立って行きました。

教会の指導者は、伴侶を亡くした人々や寄る辺のない
人々に心を配る必要があります。私たちは、このような
人々を心にかけないでいることはできないのです。時の
絶頂の時代、夜空にひときわ輝くひとつの星が現われま
した。そして、その星に従った博士たちは、みどりごイ
エスにまみえました。今の時代も変わりはありません。
博士たち、賢者と呼ばれる人たちは、天を見上げてひと
きわ輝くひとつの星を見えています。その星は私たちを
様々な機会の待つ所へ連れて行ってくれます。こうして
虐げられた人々の重荷は軽くされ、飢えた者の泣き声は
やみ、寄る辺のない者たちの心は慰められます。そして、
皆さんと彼ら、そして私の魂に救いがもたらされるので
す。

どうぞ心から耳を傾けてください。きっとはるかかな
たからこのように語りかける声が聞こえてくるでしょう。
「良い忠実な僕よ、よくやった。」(マタイ25:21)□

話し合いのポイント

1. 言葉と行ないを通して、主が力強く、また一貫し
て教えておられることがある。それは、伴侶に先立たれ
た人や父親のいない子供、孤児、貧しい人々の世話をす
ることである。

2. 特別な助けを必要とする人々は、日々その数を増
している。

3. 町、ワード部、支部のあらゆる所に、私たちの力
を必要としている人々がいる。あなたはだれを助けられ
るだろうか。

4. 問題を抱えている人々に対してさらに熱心に助け
の手を差し伸べるに当たり、私たちは親として、この学
びの場に子供たちを加えることも心に留めなければなら
ない。

1942年、うら若きアレクサンドリアは戦時下の混乱したロシアで、
800キロの道のりを横断する旅に出ました。
はるかかなたの我が家にたどり着くのは不可能かと思われたその旅の中で、
彼女を勇気づけたのは祈りだったのです。

祈りに導かれて

レジー・R・バン・ワゴナー

1941年夏、アレクサンドリア・サフロノバがわずか17歳の時、ドイツ軍は東側に目を転じると、彼女の祖国ロシアへ速やかに侵入してきました。次第に深刻さを増してきたヨーロッパの紛争が、このまま自分の生活と無縁では済まされないだろうとアレクサンドリアは感じていましたが、彼女と家族が陥った混乱は想像をはるかに超えた悲惨なものでした。

アレクサンドリアは、1924年、ウクライナ共和国でミハエル・サフロノバ、ハンナ・サフロノバ夫妻の4人娘のひとりとして生まれました。父のミハイルは善良な人であり、馬を愛する勤勉な人でした。母ハンナは信仰のあつい人でよく祈りましたが、声を出して祈ったことはありませんでした。当時のウクライナでは、家庭で宗教を教えたり、宗教活動を行なったりすることは禁じられていたからです。アレクサンドリアは両親から貴重な教訓を学びましたが、神を信頼することを教えてくれたのは、彼女の母親でした。

母親の信仰の模範は、9歳のアレクサンドリアの心に忘れられない印象を残しました。ある日、畑で働いていた父親が高熱のためにいつもより早く家に戻って来ました。ハンナはすぐに子供たちを集め、静かにしているように言うと、夫のベッドの横にひざまずき、声を出さずに祈りました。彼女は立ち上がると、心配そうに見つめる子供たちにほほえみ、「パパはすぐに良くなるわよ」と言いました。その日のうちに父親の熱は引いて、彼は仕事に戻ることができたのです。アレクサンドリアはこの経験を忘れたことはありませんでした。



17歳当時のアレクサンドリア

1941年の11月には、ドイツ軍がモスクワとレニングラードまで侵攻してきました。その月にアレクサンドリアは、捕虜の身を逃れてきたロシア兵と結婚しました。戦禍が背後に迫るのを感じて、ふたりはさらに北に逃れ、アレクサンドリアは夫の家族と同居するようになりました。しかし戦争はここにもすぐに押し寄せ、ほかの大勢の家族と共に、4カ月間、近くの森林に身を隠さなければなりませんでした。

アレクサンドリアは、夫に何日も会えずに過ごすことがたびたびありました。夫は、ほかの若者たちと同じように地下活動の抵抗組織に入り、護送車を襲っていたのです。

彼女は夫が殺されるのではないかと恐れながらも、何もできずにいました。さらにアレクサンドリアを苦しめたのは、夫の家族が彼女に示したさげすみの態度でした。アレクサンドリアはウクライナ出身で、言葉が違うため、夫の家族は彼女を見下していたのです。アレクサンドリアは当時を思い出してこう語っています。「私はいつも気が滅入っていて、泣いてばかりいました。」

ある晩、家に戻った夫は、アレクサンドリアに衝撃的な事実をつきつけました。自分がナチスに加わったことを告げ、彼女に家を出て二度と戻って来ると言ったのです。アレクサンドリアは夫の敵意に満ちた態度に脅されて家を後にし、再び彼の顔を見ることはありませんでした。

800キロも離れた実家に帰るのは不可能に思われました。その遠い道のりのことを思うと気力も失せてしまいそうです。食糧もなく、さらに悪いことに季節は冬でし



た。しかしそれらも、ひとりで戦場を横断する恐ろしさに比べれば、取るに足らないことでした。アレクサンドリアは、空腹と衰弱で雪の中に座り込み、ほほを伝う涙が刺すように冷たかったのを覚えています。彼女は絶望の中で母親の祈りを思い出し、初めて、祈ってみようと思いました。「どうか、どうか家にたどり着けますように。」祈りが聞き届けられたかどうかはわかりません。ともかくも彼女はこの危険な旅に出たのです。

冬はゆっくりと過ぎていきました。途中、アレクサンドリアに地図をくれる人がいました。まるで祈りの答えのようでした。一筋の希望にすがって、彼女は農家から農家へ、町から町へ、来る日も来る日も先へ進みました。日暮れになると、見ず知らずの人々に一夜の宿を請いました。床の上であっても、納屋であっても構いません。ただ屋内でさえあれば、戒厳令を破って捕まることも撃たれることもなかったからです。食糧はほとんどなく、家の人たちが寝静まった後で、捨てられた食物のバケツをあさりました。腐りかけたパンやじゃがいもの皮以外は食べる物といってもありませんでした。曙光がさすと、また旅を続けます。雨漏りのする納屋で寝たために、湿気で服がじめじめしていることがよくありました。

ある日の夕方近く、深い雪の中をいつになく長く歩いたアレクサンドリアは、疲れ果て、自分の足では戒厳令に定められた時間までに次の町に着けないことがわかりました。辺りにはドイツ兵がいます。それを知っている彼女は恐ろしくなりました。突然、干し草を積んだドイツ軍の3台の馬車が狭い道に現われました。アレクサンドリアは近くに身を隠しながら、ひとつの考えが浮かびました。もしも、気づかれずに馬車のひとつに飛び乗ることができれば、暗くなる前に次の町に着けると考えたのです。最後の馬車が通り過ぎると、アレクサンドリアはこの向こう見ずな計画を実行に移しました。全速力で走りながら、馬車の後部にある横木をつかみ、中に乗り込むことができました。

しばらくアレクサンドリアは割合に心地よく揺られていましたが、何キロか先で、突然、馬車が止まりました。彼女は恐怖に凍りつきました。近づく足音を耳にしながら、アレクサンドリアは目を閉じて心の中で祈りました。「愛する神様、どうぞ助けてください。」足音はさらに近

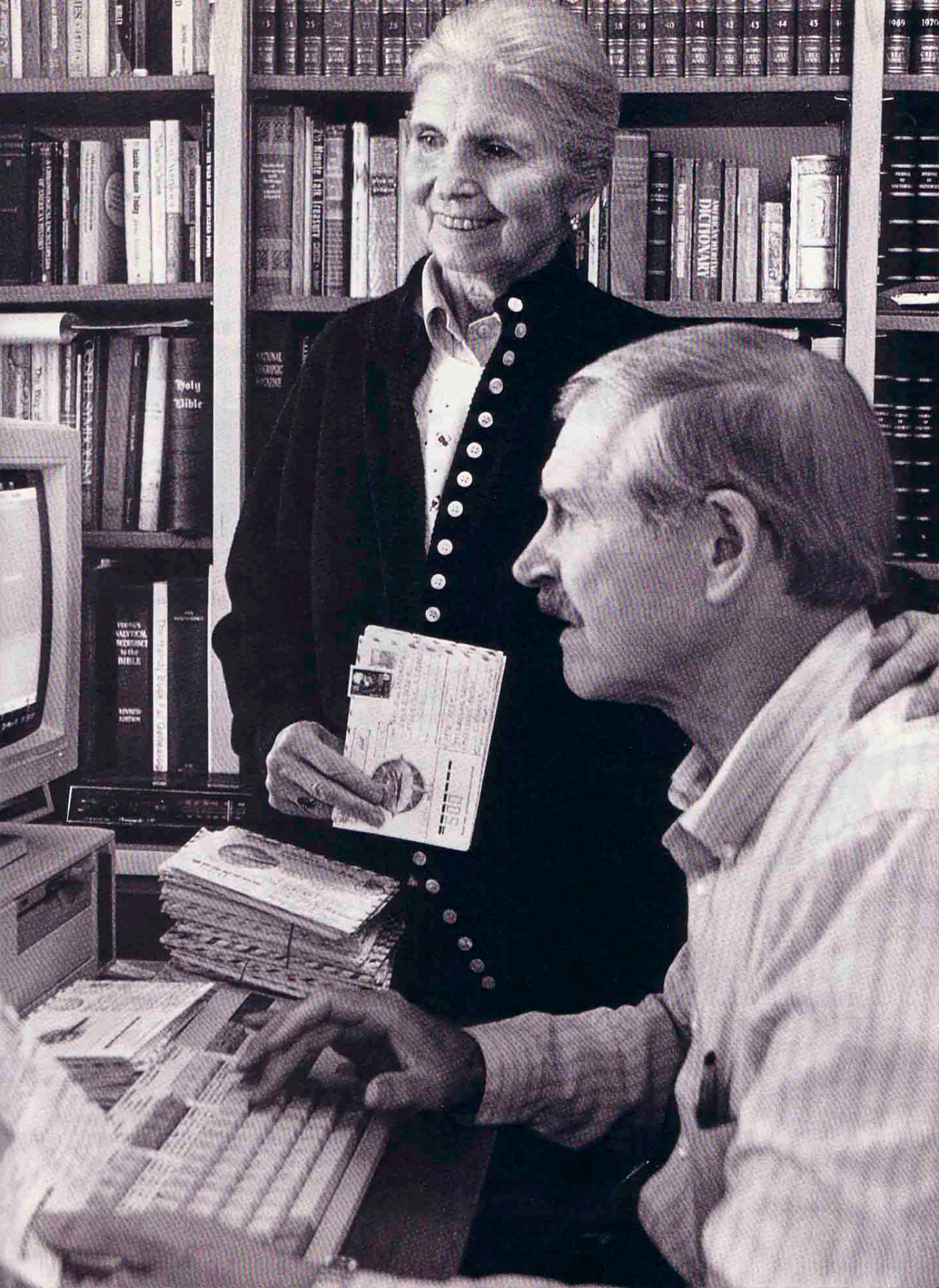
づき、アレクサンドリアのすぐ前で止まりました。アレクサンドリアが顔を上げると、若い兵士の憐れみに満ちた目が注がれていました。兵士はそこにじっとしているように合図をすると、彼女のことは何も言わずに仲間のところに戻って行きました。馬車の一隊は再び動き出し、アレクサンドリアは、無事、次の町にたどり着くことができたのです。

「天父が私を見守り、助けてくださったことを知っています。」目に涙を浮かべながら彼女はそう語ります。

何週間もの旅の末、アレクサンドリアはついに家にたどり着きました。体はやせて弱っていましたが、家族に再会でき、あふれるばかりの喜びに満たされました。ところがほどなくして、ドイツ軍はすべての若くて強壮な男女を刈り集め、列車でドイツへ送り込み、戦闘遂行のための作業に就かせました。アレクサンドリアも例外ではありませんでした。アレクサンドリア自身は気づかなかったものの、彼女が3カ月間住んだグッハウの収容所は別の人々にとっては言葉に尽くせないほどの悲しみに包まれた場所だったのです。1945年の春に、アメリカの連合軍がドイツに侵入するまで、アレクサンドリアは農地から農地へ転々と移され、様々な仕事をさせられました。

戦争が終わると、アレクサンドリアは両親のもとへ帰る計画を立てていましたが、病気のため2週間は入院しなければならず、乗るはずの列車には乗れませんでした。しかし、ロシアに帰国できなかつたことは、むしろ祝福だったと、今、彼女は思っています。ロシアに帰った人は深刻な生活難にあえぎ、むしろ生活環境はドイツの方がはるかに良かったのです。難民キャンプにいた1945年、アレクサンドリアはアメリカ人の魅力的な青年兵士と出会い、デートをしました。数カ月間の交際の後、ふたりは結婚し、2年後にロニー・グレービル曹長は、若い花嫁をアメリカに連れて帰ったのでした。

1959年に、ふたりの末日聖徒の宣教師がグレービル家を訪れた時、アレクサンドリアは、彼らのメッセージが特別なものであることに気づきました。夫とふたりの子供たちも感銘を受け、グレービル家族はバプテスマに向けて準備をしました。グレービル兄弟は空軍の命令でドイツへ転勤しなければならないことを知ると、出



発の前にバプテスマを受ける決心をしました。しかし、アレクサンドリアの方はジョセフ・スミスが神の予言者かどうかを知ろうと努めていたのです。家族がドイツに越してからのこと、夫が次のように言いました。「もし本当に知りたければ、天父のみ前に行って、尋ねればいいじゃないか。」その日の晩、アレクサンドリアは言われたとおりにしました。「何が起きたのかわかりませんが、ただ翌日の朝になってみると、私はジョセフ・スミスが予言者であるとわかっていました。」彼女はそう説明します。ほとんど時を置かず、1960年6月、当時西ドイツのカールスルーでアレクサンドリアとふたりの子供たちはバプテスマを受けました。

「とても素晴らしい経験でした。」グレービール姉妹はバプテスマを思い出して、こう述べています。「その後、私の証は強まり、福音をもっと深く知りたいという強い気持ちにとらわれました。そして、熱心に学びました。まるで扉を通して、輝く光を見いだしたように思いました。それはまさしく美しい光でした。」

アレクサンドリアは29年間も祖国の土を踏んでいませんでした。しかしその間にも、両親と妹のひとりとは、手紙で連絡を取り合っていました。家族に会いたいと思って、何度も旅行ビザを申請しましたが、断わられていたのです。1972年、ついに家族を訪問する許可が出ました。再会はいずれしくもあり、悲しくもありました。母親とふたりの姉妹が他界していて、年老いた父親は目が見えなくなっていたのです。それでも、父や妹のカタリーナをはじめ、親戚や旧友たちとの再会はずばらしいものでした。

ある時、家族でアレクサンドリアの母親が眠る墓地へ行きました。カタリーナは悲しみのあまり、墓石の上に泣き伏してしまいました。アレクサンドリアは妹の横にひざまずくと、死が終わりではないことを説明しました。母親は霊の状態で生きていること、いつかまた共に過ごせることを話したのです。カタリーナは不思議そうな顔をしましたが、目は希望に輝きました。アレクサンドリアができる限りやさしく救いの計画を説明すると、カタリーナは身じろぎもせず耳を傾け、それから、一緒に話を聞いていた父親の方を向きました。「お父さん、今の話を信じる？」父親は涙を流しながら、うなずきました。

アレクサンドリアが証をすると、家族の顔に知識の光がさすのがわかりました。かつて家族でそのような話をしたことはなかったのです。真理の種がまかれたのです。

今日、アレクサンドリアが得た幸福、霊的な強さ、深い感謝の念は、福音に対する献身を通して彼女の生活に驚くべき方法で導きを与えられてきたことを物語っています。17歳の時に受けた試練の記憶は、まだ彼女の心に痛みを残していますが、話がヨーロッパ情勢や旧ソ連の最近の変化に及ぶと、アレクサンドリアは生き生きとしてきます。アレクサンドリアの家族と同じように、祖国では大いなる刈り入れの時のために大勢のロシア人が備えられていると、彼女は確信しています。

しかも、グレービール姉妹はすでに鎌^{かま}を入れています。グレービール家では、人々の協力も得て、月に平均100個ほどの小包をロシアに向けて送っています。中には、聖書とモルモン経、「福音の原則」、最初の示現のパンフレット、イエス・キリストの絵、それにグレービール姉妹自身の手紙や証などが入っています。

しかも、驚くほど多くの返事が返ってきます。グレービール姉妹は、ロシアから最初の礼状が届いた時の彼女の気持ちを、やさしいまなざしでこう語ります。「とても感動したんです。言葉では表現できません。とめどなく涙を流しました。」

今でもグレービール家には、パンフレットを希望するたくさんの手紙が寄せられています。そうした手紙のひとつに、次のようなものがありました。「私は神に関する知識に飢えています。これほど熱望したのは初めてです。主があなたに靈感を授けられ、私に助けを与えてくださるように、お祈りいたします。末日聖徒イエス・キリスト教会についてもっと知りたいと思います。また、教会が私の人生にどのように平安と満足を与えてくれるのかお教えてください。どのような資料でも結構です。送れるものをすべて送ってください。」(一部抜粋)

ロシア語なまりのある、魅力的な英語で、アレクサンドリアは好きな聖句を引用しました。「そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである。」(エペソ2:19) 私たちがどこに住んでいようと、主は身近におられ、助けを与えてくださることを、彼女は知っています。□

モルモンメッセージ

行き先は 同じですか



「精神をひとつにし
心をひとつにして決心を固め
あらゆる事に一致結束せよ。」

(II ニーファイ 1 : 21)



3人のニュージーランド人

ジャネット・トーマス



一 ユージーランドという国は、世界
一 界のどこから見ても遠い地の果
てのように感じられるかもしれませんが。
でもニュージーランド人は寂しがって

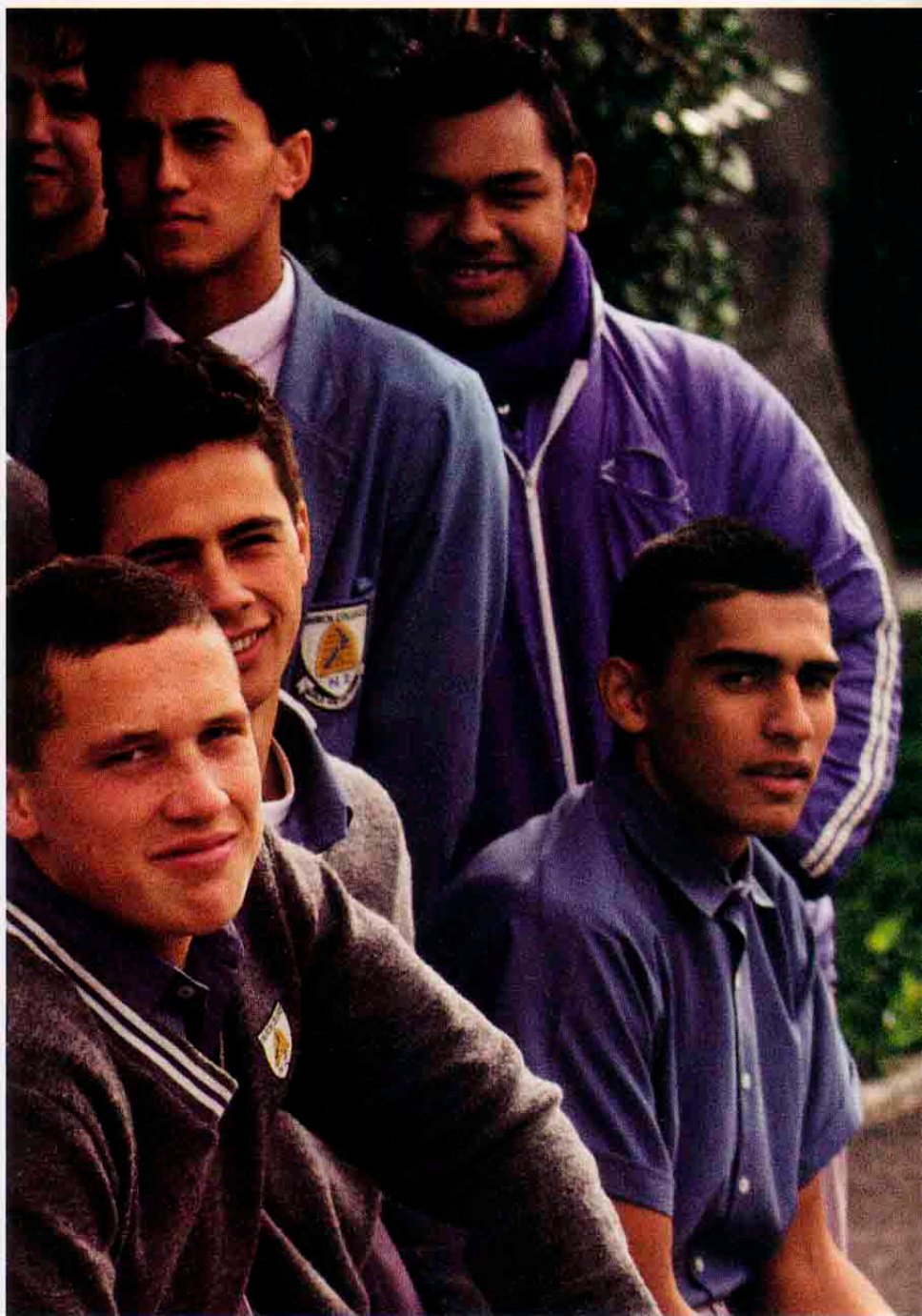
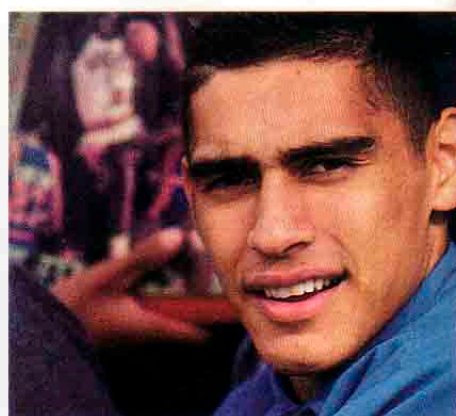
左——アビー・ロータ(後列右)は、ワ
ード部のローレルの仲間たちと強い友
情のきずなで結ばれている。

上——護身術のフォームを披露する大
会優勝者のアビー。

はいません。この美しい国は、世界の
ニュースに取り上げられることは少なく
なくても、住み心地のよい素晴らしい国
であることを彼らはよく知っているか
らです。ニュージーランドは、ふたつの
大きな島と、多くの小さな島々から
成り、人間よりもたくさんの羊が住ん
でいる、緑の非常に美しい国です。羊
たちが愛する羊飼いの声を聞き分ける
ように、ニュージーランドの末日聖徒
たちも予言者の声に耳を傾けています。

生活の中で福音を大切にしている、
3人の才能豊かなニュージーランドの
青少年を紹介しましょう。

右——ロメーン・マーシャルと父親。
彼は教会員ではない友達に良い影響を
与えられるように努めている。
下——ロメーンは福音を生活の基にし
ようと、みずから決心した。バスケット
ボールの仲間たちは、一致団結して
互いを強め合っている。



テレアピー・ロータ

アピーの足に気をつけて！
キックが命中すれば、一撃の下に倒されてしまいます。

でもアピーの足が怖いのは、テコンドー(跆拳道。韓国の護身術)の試合中だけです。ニュージーランドのトコルア市に住む16歳のテレアピー・ロータは、普段は学校で生徒会会長を務める素直で賢い女の子です。でも時間のあるときには、父親から護身術の手ほどきを受けています。彼女はその才能に恵まれ、テコンドー女子ジュニアの部の全国大会で優勝しました。この成功に、彼女はちょっと驚いています。大会で試合をするのは初めてだったからです。アピーは、信じられないという表情でこう話しています。「たかさんの観客が応援してくれました。私の知らない人たちまでもですよ。」

6人兄弟の長女であるアピーと、10歳になる弟が家族で一番熱心に父親から訓練を受けています。ふたりはスポーツクラブに通い、そこでアピーも男子と一緒に練習に励んでいます。女子の中には、彼女と互角に競い合えるだけの強い選手が少ないからです。

アピーはスポーツクラブで多くの時間を過ごしますが、彼女の親友は、ワード部のローレルの仲間たちです。「私たち4人はとても仲の良い友達です。何をするにも皆一緒です。良い友達に恵まれて本当によかったと思います」とアピーは言います。「私たちはよく一緒に笑います。物事を何でも悲観的に見るようなことはしません。」

アピーや友達にとって、少しでも笑いを生活に取り入れることで、16歳と

いう年齢にありがちな誘惑を避けやすくなっています。アピーはこのように述べています。「16歳という年齢で一番むずかしいのは、人の誘いを断わることだと思います。たとえばだれかに誕生日パーティーや旅行に誘われたとします。お父さんやお母さんは、たぶん子供たちが誘惑に遭うということを承知しています。だから親の助言を聞いて、誘いを断わるのです。すると彼らは、仲間に引き入れようと何とか説得しようとします。でもやっぱり断わらなくてはならないのです。」アピーと彼女の友達、教会の標準に反する遊びをしなくても、たかさんのことを楽しんでいます。ですから、行くべきではないパーティーに誘われても、容易に断われるのです。

アピーが現在もこうして元気で生活している、ということも実は家族で教会に入った理由のひとつなのです。というのも彼女は8歳の時、重いぜんそくで大変苦しんでいました。そこで宣教師たちが彼女を祝福すると、まさにその直後に彼女は癒されたのです。アピーは言います。「私は体が本当に弱って、何もできなかったのです。食べたり飲んだりすることさえできない状態でした。でも宣教師が『アーメン』と言った瞬間、元気になったのです。私は目を開けて、飲み物が欲しいと言いました。皆は心からほっとして、思わず吹き出してしまいました。私は祝福の言葉についてよく考え、それによって自分は元気になるだろうと確信しました。家族で教会に入ったのは、私が9歳の時でした。」

アピーには学業を続ける計画があります。彼女は大学に行って、ビジネス

の分野の勉強をしたいと望んでいます。

ともかく、飛び掛かってくるアピーの足には気をつけてください。

ロメーン・マーシャル

家の前で友達とバスケットボールをするとき、ロメーンは、緑の丘に白くそびえ立つ神殿を見上げずにはいられません。ロメーンは文字どおり、末日聖徒イエス・キリスト教会の神殿のすぐ近くに住んでいるのです。近所に住む人々もほとんどが教会員です。友達も多くは教会員です。学校のクラスメートや先生も教会員で、高校のバスケットボールチームもほぼ100パーセント教会員です。

ロメーンは、ニュージーランドのテンプルビュー市に住んでいて、「チャーチカレッジ」という、教会経営のちょうど中学と高校に相当する学校に通っています。彼は教会員に囲まれて学生生活を送っていますが、ただ自分が教会員だからという理由でそうしているわけではありません。はっきりとした自分の生活設計を持っていて、しかも福音をその土台としているのです。

17歳のロメーンが所属するチャーチカレッジの「A-1バスケットボールチーム」の仲間たちは、国中でよく知られています。2年前まで、全国学生バスケットボール選手権で、5年間連続優勝を果たしていたからです。ところが、昨年は3位に落ちてしまい、ロメーンはそのことをあまり話したがありません。ロメーンたちは学校に戻ってから、ほかの生徒たちに負けた原因を説明しなければならないという苦い経験を味わったのです。彼らはもう二度

友達と一緒に音楽やダンスを楽しむ、才能豊かな女性ルーシー・シルバーは、自らの芸術的な才能を駆使して周囲に潜むこの世界の美を探し出します。



とそんな経験をしたくありませんでした。また1位に返り咲くと決心していました。そして実際に取り戻したのです。翌年、A-1の男子チームと女子チームは両方とも、全国大会で優勝を果たしました。

ロメーンは言います。「ぼくたちはモルモンということで、試合をしていてもよく目立ちました。下品な言葉を使わないので、ほかのチームから変わり者に思われていたのです。それでもぼくたちは、彼らを楽しく笑わせることができました。」チャーチカレッジは、追われる立場にあったので、ほかのチームはチャーチカレッジとの試合を心待ちにしていました。「ぼくたちとの試合が、どこのチームにとっても最高にいい試合になったからです。」

ロメーンには、近くのハミルトンという町の小学校に通っていた時に知り合った友達がいる、同じ信仰を持っているわけではないのですが、今なお仲の良い友達です。ロメーンは言います。「違う道を歩んではいても、ぼくたちは友達です。ぼくはすべきでないことをはっきり言いますが、彼らは、なんとか耳を傾けてはくれます。小さいころはこうした友達から影響を受けたこともありましたが、今では何のプレッシャーも感じません。彼らのすべきことや、正しいことを行なうように言って嫌われても、気にはなりません。」ロメーンは影響されるのではなく、影響を与えているのです。彼らは教会員ではありませんが、今でも親しい交際が続いています。

ロメーンはスポーツ関係の職業を希望しています。しかしほかの国と同じように、ニュージーランドでも、バス



ケットボールの最強選手たちが集まるのはナショナルチームであって、それを職業とすることはできません。その代わり、ロメーンはコーチになろうと計画しています。彼は決断を下すことについていくつかの教訓を学びましたが、それは将来良い教師になるためにも役立つでしょう。

ルーシー・シルバー

本当の名前はルシアンといいますが、テンブルビュー市に住む友達達は皆彼女をルーシーと呼びます。絵を描くのが好きな彼女は、時間があるときにはよくスケッチブックを手に使っています。

「小さいころ、私は兄の姿をよく目で追っていました」と16歳のルーシーは言います。「兄は耳こそ聞こえませんが、人並み以上の観察力を持っていると思います。絵を描くのが上手なのです。兄が絵を描いている姿を何時間も見ていることがよくありました。それで私も絵に興味を持ち始めたのです。私は兄に絵を教わりました。」

ルーシーの兄は現在、結婚してオーストラリアに住んでいます。遠くに住むこの兄のことを思うと、ルーシーは寂しい気持ちになります。でも兄が幸せに暮らしていると思うと、自分も幸せな気持ちになるのです。

ルーシーもニュージーランドのチャーチカレッジの学生で、際立った芸術の才能で知られています。絵を描くことでは特に群を抜き、音楽を愛し、踊りにも非常に優れています。

しかし、ルーシーには考え深い、内

省的な面があります。幼いころから家族は教会員でしたが、福音が真実であることを自分自身で発見する必要があるとルーシーは感じました。ルーシーはこう述べています。「子供っぽい信仰から、真の知識に目覚める必要があると気づいたのです。偶然に起きたにしては、世界はあまりにも信じ難いことばかりですから。」

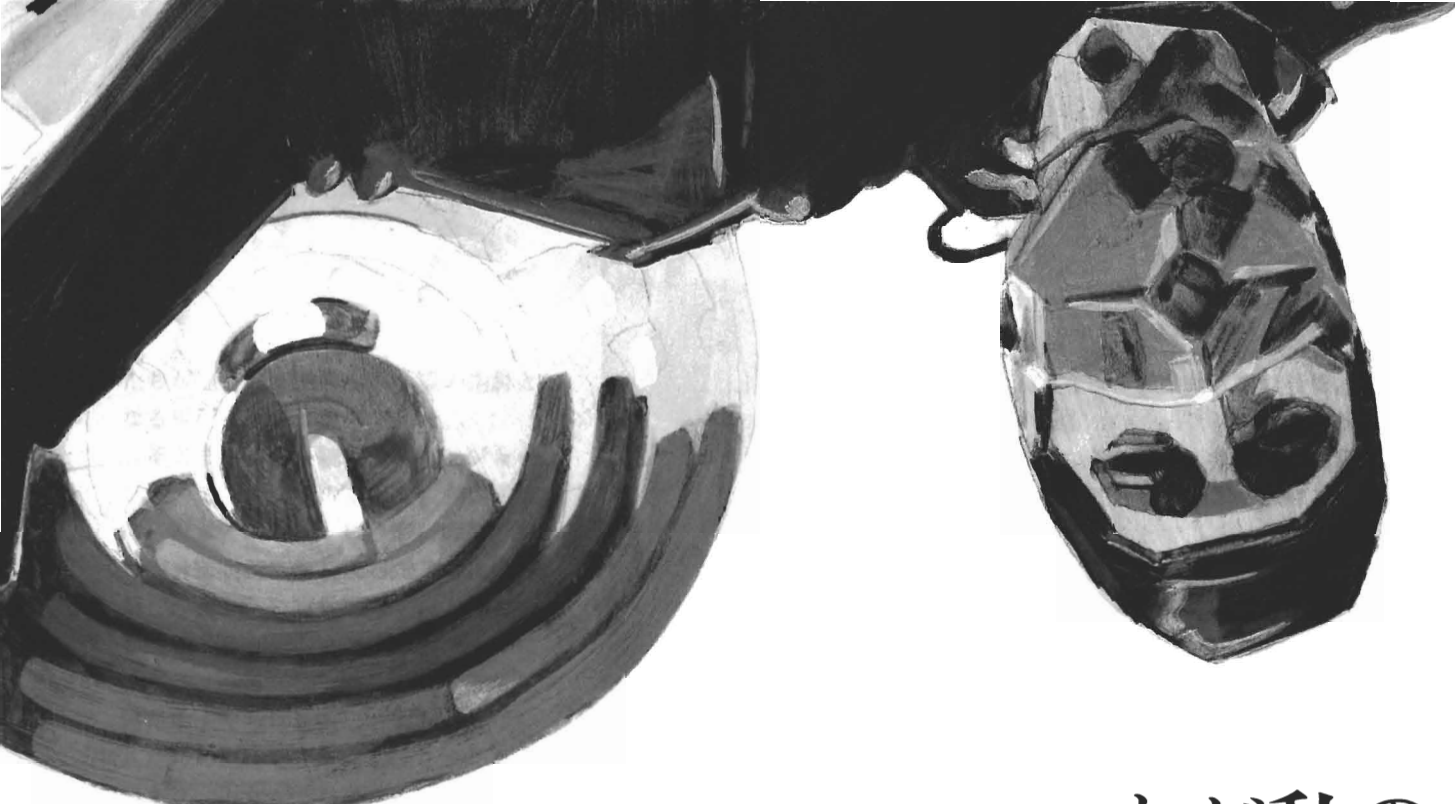
証を得ようと苦しんでいる友達がいたら、ルーシーは次のようにアドバイスするでしょう。「真理を知りたいという望みを持ち、福音の原則を実際に試してみるなら、真実かどうかわかります。福音は人々への奉仕をも意味しています。奉仕をして、福音の原則に従っているなら、すばらしい気持ちを感じます。いつも祈って努力し続ければ、だんだんと証が得られます。偶然にそうなるわけではありません。みたまがとても強く働きかけるときもあるかもしれませんが、大抵は少しずつ感じられるようになるのです。」

ルーシーは神殿の近くに住んでいることを、うれしく思っています。彼女はこう言います。「多くの人たちが長旅をして神殿にやって来るのを見ます。本当に心を動かされます。ときどき私たちは神殿の近くに住んでいることを当然のように思ってしまうのですが、テンブルビュー市に住んでいることを私は感謝しています。人々が神殿に来て

示す態度を見ると、私たちがどれほど恵まれているかがわかるのです。」

ルーシーが描く人生の卓越したビジョンは、美しいものです。□

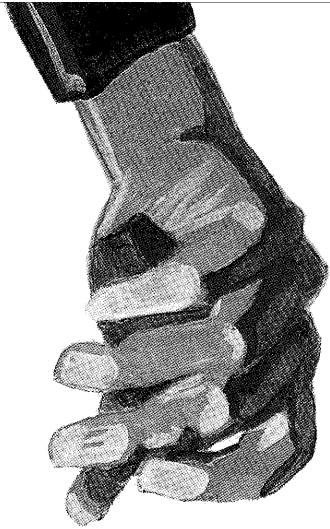




まだ私の
最期ではない

カルロス・ホセ・ガルシア





1989年4月のある昼下がりのことです。パブリートという名の同じアパート街に住む子供が、助けを求めて走り寄ってきました。13歳になる3人の少年たちに物を取られて、嫌がらせをされたので、私にその奪われた鎖付きの時計を取り返してきてほしいと言うのです。少年たちは私が近づい

ても、例のごとく逃げ出そうともしません。パブリートの時計を返すようにと言っても、無視しています。少年たちを調べてみましたが、何も出てきません。彼らは私に服を探られて、うろたえました。口汚く私をののしり脅しながら、アパートを離れていきました。私はそんな脅しの言葉をまともには受け取りませんでした。

2日後、何人かの友人に、数人の若い男たちが君のことを捜し回っていると言われました。

次の月曜日、25歳くらいの若い男たちが、一団となって近寄ってきました。その中のひとりが私目掛けて突進し、鼻面に殴りかかってくるまで、私は何が起きるのかまったくわかりませんでした。よけようとしたのですが、遅すぎました。逃れることなどできません。初めは体中を殴られ、そのうち、割れた瓶で切りつけられました。突然、左の脇に冷たいものを感じました。だれかが肋骨の近くをナイフで突き刺したのです。

襲撃は終わりました。ふたりの警官が駆け付けて来たため、男たちは逃げ去りました。友人が私を助け起こそうとしたのですが、多量の出血で衰弱し、意識を失ってい

ました。ナイフの刺し傷に加えて、頭部と太ももに深手を負い、顔中あざだらけではれ上がっていました。

警察の車に乗せられて地元の病院に運ばれました。そこでも傷を縫合することはできたのですが、もっと大きな病院に行って、内臓に損傷がないかをレントゲンで調べなければなりませんでした。

レントゲン検査が終わると、内臓器官の損傷を適切に手当てするために、緊急に手術が必要だと医師に言われました。

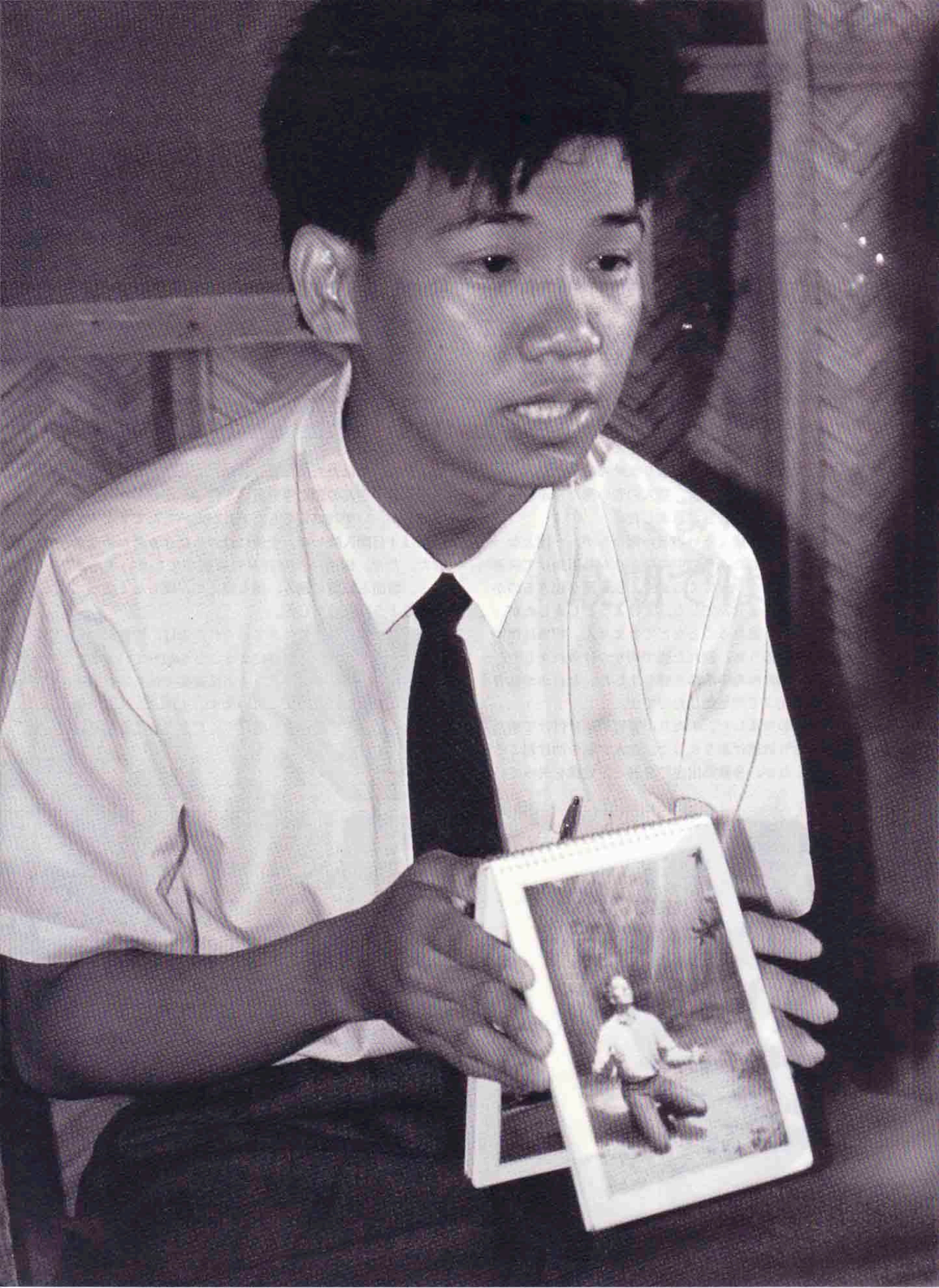
手術室に入る準備をしている時、父が数分でいいから私と過ごす時間をくださいと頼むと、医師は手短かに済ませるようにと言いました。そして、父ともうひとりの神権者が、私の頭に手を置いて、祝福をしてくれました。

しばらく私は手術室にいましたが、医師は手術を終えて部屋を出ると父に言いました。「息子さんの脇を刺したナイフの傷は極めて深いのですが、致命傷にはなっていません。私はただ傷口をきれいにしただけです。あなた方が息子さんの頭に手を置いて何をしたのはわかりませんが、いずれにしても、あれが効いたんですよ！」

私は4日間入院して、全快にはさらに3カ月かかりました。ただ、伝道の予定日が先に延びてしまいました……。増血も順調に進み、傷も癒えて、間もなく立って歩けるようになりました。

今日、私がこうして生きていられるのは、神権の力とイエス・キリストへの信仰によることを知っています。私がこのベネズエラのマラカイボ伝道部で仕えることを、主が望んでおられたのだと思います。主のぶどう園で働けるように、主が私の命を助けてくださったことを感謝しています。□





なぜ私たちはすべての国に 福音を伝えていないのですか

主は、私たちはあらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる国語の民、あらゆる世の人々に福音を宣べ伝えなければならないと言われました。にもかかわらず、まだ地上のすべての国々で伝道活動が行われていないのはなぜですか。

本誌の答えは問題解決の一助として与えられたものであり、教会の教義を公式に宣言するものではありません。



回 答

ダニエル・H・ラドロウ
プロボ、プレゼンティブュー第5ワード部
福音の教義クラス教師

いくつかの国々で公式な伝道活動が行われていないことには、様々な理由があります。このことに関連する原則を見直すために、ふたつの信仰簡条を見てみましょう。

「われらは、王、大統領、統治者、長官に従うべきを信じ、また法律を守り、敬い、支うべきを信ず。」(信仰簡条第12条)

ある国々では他人の宗教的な信条を変えさせようとするを禁じており、

それに違反する場合は、双方に罰金が課せられます。教会の指導者は、これらの国々の指導者に、その法律を変えるよう合法的、政治的な方法を通して働きかけています。しかし、その国での伝道活動が法的に認められない限り、教会が公的に伝道部を設立することはないのです。

このような国々の中には、教会に対して、ほかの人々を集会に誘ったり、改宗させようとしめない限り、その国に住

む教会員同士で集会を開いてもよいという許可を与えてくれた国もあります。

伝道活動に関連する重要な原則は、信仰簡条第5条にも書かれています。「われらは、福音を宣べ、且つその儀式を執り行うためには、啓示と、権威ある者の按手により、神によりて其任に召されねばならぬことを信ず。」

この地上における神の王国は秩序の家であり、宣教師をはじめとする王国を代表する者たちは、権威ある指導者を通して、神によって召され、遣わされなければなりません。確かに主は、再臨の前に、あらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる国語の民、あらゆる世の人々に福音が宣べ伝えられると言われました。しかし主はまた、そのみ業は「[主の] 心にかなう時に」(Ⅲニーファイ20:29)、「[主の] 道に適いて」(教義と聖約104:16)行なわれるということ、聖典の中で繰り返し述べておられます。また私たちに、「神を議せんとすることなかれ」(教義と聖約22:4)と教えておられます。

ですから私たちは、スペンサー・W・キンボール大管長が教えられたように、主が導かれる地ならどこであろうと、福音を携えて行けるよう自らを備えなければなりません。また主が

国々の指導者の心を開いてくださり、彼らが伝道活動を許可してくれるよう、祈らなければなりません。しかし、特定の国に、いつ宣教師が送られるかは、主がお決めになることであり、主が選ばれた指導者を通して啓示されることでしょう。

キンボール大管長が示された、備えに関する次の言葉にも心を留めてください。「教会が組織されている地域から送り出される宣教師の数が増加して可能性の極限に近づく時、すなわち教会の資格ある青年がすべて伝道に出る時、それは海外のステーク部や伝道部がひとつ残らず、自国で働くに十分な数の宣教師を自らの力で出〔す〕……時である。また新しい地域で伝道を開始するに当たり、使徒を助けるためにふさわしい人が働く時でもある。さらに通信衛星やそれに類する発見もかなりの程度まで進み、あらゆるメディア——新聞、雑誌、テレビ、ラジオ——が最もその力を発揮する時である。また私たちはおびただしい数のステーク部を組織し、これがさらに大きな飛躍への土台となるであろう。さらに今まだ神権を受けていない若人、また伝道に出ていない、結婚していない大勢の若人を不活発な状態から引き上げる時

である。このような状態が訪れた^{あかつき}には、いや訪れるまでには、私たちは主が言われた『すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ』という主の命に近づくことであろう。』（『全世界に出て行って』「聖徒の道」1974年11月号、p. 483）

キンボール大管長がこの重要な予言の声明を出されて以来、私たちが主のみ業に力を添える備えができるにつれ、主がそのみ業を広げられるのを目にしてきました。こうしてついには、あらゆる国民、あらゆる血族、あらゆる国語の民、あらゆる世の人々に福音が宣べ伝えられることでしょう。それまで私たちは、個人としても教会としても、すでに与えられている責任に対し、できる限りのことを行なわなければなりません。現在与えられている責任を、心を尽くし、勢力を尽くし、思いを尽くし、体力を尽くして果たせるようになるに従って、私たちは、主が各地で進められるみ業に携わるために備えられることでしょう。

1990年10月6日に開かれた160回半期総大会で、ゴードン・B・ヒンクレー副管長の言葉を引用されました。「心から証します。このみ業は、すべての

国、すべての人が私たちのメッセージを受け入れる機会を得るまで前進していきます。この使命が果たされるよう、様々の障壁が取り除かれ、ある人々はそれを目の当たりにすることでしょう。天父はご自分の福音がすべての国境を越えて広まるよう、世のもろもろの状況を変えていかれるのです。……私たちは、主のみこころを喜んで行なっていることを日々の生活の中で証明しなければなりません。すなわち、回復された福音を広め、世の人々に証を述べ、福音を分かち合うのです。』（「エズラ・タフト・ベンソンの教え」p. 174）

最後に、予言者ジョセフ・スミスの言葉を引用しましょう。「真理の旗は掲げられた。いかなる汚れた者の手も、このみ業の発展を止めることはできない。迫害は威を振るい、暴徒は連合し、軍隊が集合し、中傷の風が吹き荒れるかもしれない。しかし神の真理は大胆かつ気高く、悠然と出で立ち、あらゆる大陸を貫き、あらゆる地方に至り、あらゆる国々に広まり、あらゆる者の耳に達し、神の目的は成し遂げられるであろう。かくして大いなるエホバは、み業は成ったと告げられることだろう。』（「教会歴史」4：450）□

家庭を築く

聖典には、「すべての賢い女性は家を築く」（欽定訳箴言14：1）と書かれています。レンガやわらぶきの家に住んでいる女性もいれば、木造や石造りの家に住んでいる女性もいます。また、結婚している人もいれば独身の人もおり、子供がいる人もいない人もいます。置かれた状況がどうであれ、どの姉妹も家庭を築きます。そしてそのためには、青写真、すなわち計画が必要となります。

中央扶助協会会長のイレイン・L・ジャック姉妹は、家庭で計画を立てることの重要性について次のように述べています。「末日聖徒の女性にとって、ホームメイキングという言葉にはとても重要な意味があります。ひとりで住んでいても、家族と一緒に住んでいても、家庭の中で行なう仕事はすべて永遠の観点から見て重要なものであり、最善を尽くして果たすべきものだからです。

ホームメイキングには温かい家族関係を築くことも含まれます。また、家族の衣食を賄い、一人一人の健康を気遣うなど、昔も今も変わらない、賢明な主婦としての日常の事柄も含まれます。」

ホームメイキングという言葉が指している活動は、どの範囲まで及ぶのでしょうか。

愛すること、学ぶこと

愛し、学ぶことに心を向ければ、毎日の家事の中に永遠の価値を見いだすことができます。トーマス・S・モンソン副管長は、家庭は家族が良い態度を身につけ、信念を心の奥深く植えつける教室であると述べ、次のように説

明しています。「家庭は人生の実験室です。」（「聖徒の道」1992年1月号、p. 75）

賢明な女性は、家族の幸せを犠牲にしてまで、家の中を完全に整える方を重視したりはしません。ソルトレークシティのペメラ・サリー姉妹はこのように述べています。「家事や洗濯はずっと私につきまといりますが、3人の子供たちはいつまでも私と一緒にいられるわけではありません。はだしになって1時間も砂遊びをしたり、冬の午後、家中のおもちゃを使って特製の宇宙ステーションを作ったりしたことは、私にとって特別な思い出です。年月がたつにつれて、子供たちにとっても特別な思い出になれば、と思います。」（「エンサイン」1984年3月号、p. 33）

家庭を築くに当たっては、物質的な財産よりも霊的な成長が大切です。ニュージーランドのヌハカに住むハーピー一家の両親は5人の子供たちに、儉約

し、主に献金を納め、収入の範囲内で生活するように教えたいと思っています。子供たちが、自分たちより友達の方が多くの物を持っている、と不平を漏らすとき、ハーピー姉妹はこのように諭しています。「私たちはきょうのためではなく、永遠のために準備しているのよ。物質的な物は来世へは持って行けないものね。」

女性が家族を愛する心は、家庭での優先順位にどのような影響を及ぼしますか。

祈ること、自己を大切にすること

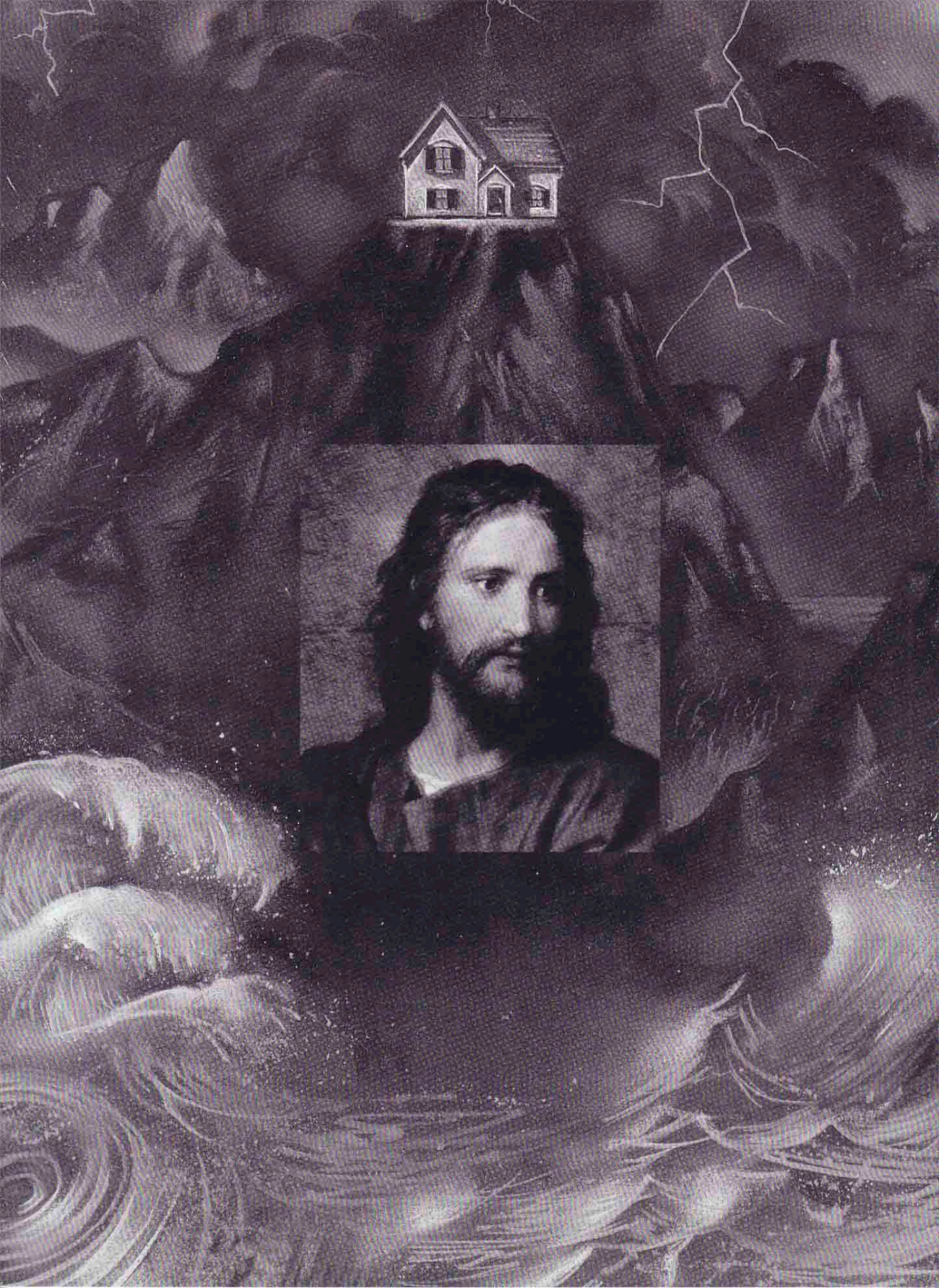
家庭を築く仕事が自分の能力ではとても無理だと感じるときは、求めさえすれば主の助けをいただけることを思い出しましょう。「何にてもわが名によりて御父に願うところ^{なんじ}のため必要なことは汝らに与えられるべし。」（教義と聖約88：64）

バランスのとれた生活をするためには、私たち自身の精神的、肉体的、霊的な健康にも気をつけなくてはなりません。元中央扶助協会会長のバーバラ・スミス姉妹は次のように強調しています。「私たち自身の幸福に対する最終的な責任は、私たち自身にあります。重要なのは私たちの態度であり、物事を受け入れる心であり、思慮深さです。」（「エンサイン」1976年3月号、p. 22）

皆さんの家庭が、良い模範を示し、互いに教え合い、悩みや問題から離れて心を慰める場となり、家族一人一人の生活を豊かにする所となるように願っています。

喜びをもって家庭を築くには、どうすればよいでしょうか。





大水，風，地獄の門

アーサー・R・バセット

キリストはニーファイの民への偉大な説教を締めくくるに当たって、
4つの原則を教えられました。
私たちもその原則に従うとき、
キリストの福音という岩の上に家、すなわち生活を築き上げることができます。

イエスがニーファイの民に対して語られた偉大な説教は、非常に貴い教えに満ちています。その説教は、文字どおりに多くの味わい方が可能です。これから、その偉大な説教の最後の部分に対するひとつの視点を紹介したいと思います。つまり、その説教と対応するジョセフ・スミス訳の聖句を基にして、聖書の山上の垂訓を見る方法です。

このような視点から読んでみると、この説教の最初の章(Ⅲニーファイ12；マタイ5)はおもに、キリストの弟子とはどのような人物でなければならないか、ということに焦点を合わせているのがわかります。つまり、八福の教えに挙げられている様々な特質から始まって、最後は、私たちの天の御父が完全であられるように、完全な者となりなさいという戒めで締めくくられているのです。

次の章(Ⅲニーファイ13；マタイ6)は、主の弟子たちが、より完全な者になろうと努めるとき、神から助けをいただくにはどうしなければならないのか、という点を中心となっています。つまり、断食、真心からの祈り、そして、神以外にはその努力が知られないような方法で、なおかつ人から報いを求めることなく、ただ神からの報

いだけでよしとするような施し物をする事、などです。

ジョセフ・スミス訳で見ると、この説教の最後の章(Ⅲニーファイ14；マタイ7)で、救い主は弟子たちに福音を伝えるために出かけて行くに当たって、どういふことを話さなければならないのかを教えておられます。この章の第1節をジョセフ・スミス訳で読むと、イエスが人々に説くように弟子たちに教えられた言葉が記されているのがわかります。その後の記録は、ジョセフ・スミス訳では、正式な説教の続きというよりも、ときには、師とその弟子たちの対話という形をとっています。

この教えが、福音の教えを分かち合いたいと望むすべての人々に与えられたメッセージだとすれば、説教の最後の部分に当たるこの章は、キリストの教会のあらゆる会員にとって有益な勧告を含んでいると同時に、教会に改宗しようとしている人々にとっても、以下の4つの大切なメッセージを含んでいます。

1. 人を裁いたり、責めたりしてはならない。むしろ、自分自身の生活を向上させていくことを第一に求めなければならない。

2. 「王国の奥義」を早急に追い求めるのではなく、

まず第一に神と交わりを持つよう心がける。

3. 主と誓約を交わす。誓約を交わすことによって、大いなる祝福を受けられるようになると同時に、様々な問題やチャレンジにも遭遇し得ることを理解しておかなければならない。

4. 人を愛するように努める。みたまのささやきや導きに耳を傾け、教会員の中に不完全なところを見つけたとしても、それを福音が不完全なためと考えないようにする。

不当な裁きを避ける

私がまだ若い宣教師のころ、あることに気づきました。教会に加入した人たちの中に、自分が宣教師の教えを受け入れた時のような情熱をもって福音を受け入れようとしない周囲の人々に対して、批判的な気持ちを持つ人たちがいたのです。彼らは、自分をまだ完全にできていないうちに、まず人を変えたいと考えたのです。私はまた、これと同じような問題で苦しんでいると思われる宣教師や会員も、数多く見てきました。

建設的でない批判、あるいは主が言われたような「不当な裁き」をしてしまうのは、いわば人間の持つ共通の弱点かもしれません。それは、独善と言うべきかもしれませんし、自分の間違った行為を正当化する言い訳かもしれません。

しかし、パウロもモルモンも言っているように、福音の教えの中心は、クリスチャンとして備えるべき3つの特質にあります。つまり、信仰と希望と愛、しかもそのうち愛(キリストの純粋な愛)が一番大切だとされています。(Iコリント13;モロナイ7:38-48参照)このキリストの純粋な愛は、人を結び合わせる力であり、常に人を助けたいという思いをもたらします。一方、不当な裁きや批判は、それと反対の働きをします。残念なことに、私たちの多くは、こうした不当な裁きの被害者ともなり、加害者ともなってきました。そして、それが人間関係を大きく損なっているのです。

しかし、何らかの人間関係を築こうとする場合、それが意図的であろうとなかろうと、どうしてもある種の判



PHOTOGRAPHY BY JED CLARK

私たちは、人を裁いたり責めたりすることなく、自分の生活を改善しようと努めるべきである。

断をしてしまうように思われます。私たちはだれであっても、過去を振り返って、自分の下してきた未熟な裁きのことを考えると、自責の念にかられるものです。私自身の生涯を振り返ってみても、確かにほかに様々な出来事がありますが、ひとつの出来事だけは特によく覚えており、今なお苦い思い出として残っています。

ある日、私がユタ大学に併設されているインスティテュートのクラスで教えていた時のことです。ひとりの女子学生が、開会の祈りの間ずっとだれかにささやき声で話しかけていたため、私は当惑していました。問題の学生がだれかは、すぐにわかりました。その後も、授業中、ずっと話し続けていたからです。私は、ふたりにたびたび視線

を向けました。いつか私の気持ちにふたりが気づいてくれるだろうと考えたのですが、一向にその気配はありません。授業中、何度か、それほど緊急に話さなければならない用件があるのなら、教室を出て外で話し合ったらどうか、と言おうとしました。しかし、幸いなことに、どういうわけか、私は自分の気持ちを口に出して言ったりはしませんでした。

授業が終わった後で、そのうちのひとりの学生が私のもとに来て、あの友人が聴覚障害者だということを、授業が始まる前に言わなかったので申し訳なかったと謝りました。その友人は読唇はできたのですが、私がいつものように、黒板を使いながら、肩越しに生徒に話しかけ、結果的には生徒に背を向けて授業を進めたため、その学生が講義の内容を「通訳」してくれていたのです。私がもしその事実を知らないまま、軽率な裁きを口に出していたら、後でどれほど後悔しただろうと思うと、そういう事態を避けられたことを、今日に至るまで感謝しています。

しかし、救い主がその説教の中で言われている裁きとは、特に、自分自身の生活を多くの面で変えなければならない人々が、なおほかの人を裁いている事実を指して言っているようです。それは、まるで全盲の人が、目の悪い人のために、微細な眼科手術をしようとするようなものだからです。

ジョセフ・スミスはマタイによる福音書第7章1節の翻訳の中で、主が弟子たちに、正しい裁きに努め、決して不正な裁きをしてはならないと教えられたことを明らかにしています。正しい裁きとは、みたまを受けるにふさわしい人物になりたいと努力を重ねている人々が、みたまの影響を受けて初めて可能になるものです。このようにして裁きをする場合には、人を高めこそすれ、決して人を傷つけるようなことはありません。

「汝らは人をさばくごとく己れもまたさばかれ」(Ⅲニーフアイ14:2)と言われた主の知恵の深さは驚嘆すべきものです。イエスは、その前にも大群衆の前に立って祈りについて教えておられる時、この聖句と同じ考え方を次のように説明されています。「われらに対して罪を犯す者をわれらの赦す如くわれらの罪をも赦したまえ。」(Ⅲニーフアイ13:11)また、後に「主の祈り」と呼ばれるようになった教えを終えるに当たって、救い主は再び次のようにそのみこころを表わし、人々が学ぶべき原則を強調されました。

「汝らもし人の罪を赦さば、汝らの天の御父もまた汝らの罪を赦したもうべし。

されど、汝らもし人の罪を赦さずば、汝らの父もまた汝らの罪を赦したまわじ。」(Ⅲニーフアイ13:14-15)

つまり、私たちが人を裁くときに用いる基準と同様の基準で、私たちがまた裁かれるということです。もし、日ごろ人を赦しているならば、最後の裁きに臨んで神も赦して下さるでしょう。一方、人を赦していないなら、最後の裁きの座で、赦しを求めることはできません。もし、人に日ごろ思いやりを示していないのなら、神に似た者とはなっていないのですから、思いやりをもって生活している者に与えられる責任やそれに伴う祝福を受ける資格がないということになります。思いやりを示していない人には、正義の力が働いて、神の王国では、より小さな責任しか与えられません。神の慈悲をもってしても、正義の働きを無視するわけにはいかないのです。そのような状態にある人は、ほかの人を管理する権能を受ける備えも、日の光栄の王国において神のみもとで生活



**「王国の奥義」を
追い求めるのではなく、
まず神と交わることを
学ぶ必要がある。**

する権限を授かる備えもできていないのです。実際、私たちは人を裁くとき、自分がどんな人間かを外に表わしているのです。

救い主はその後、新大陸で選ばれた十二弟子たちに、次のように教えられました。

「汝らはわれが汝らに委ぬべき正義の裁判によりてこの民を裁判する者となるべき故に、汝らはいかなる人物にてあるべきか。まことに汝らはわれと同じ人物ならざるべからず。」(Ⅲニーフアイ27:27)

奥義を求めるのではなく、主を求める

偉大な説教の中で人を裁くことについて説かれた主は、次に、まだ事態の重さを十分に理解していない人々が神聖な事柄に触れた場合の問題点について話を進めておられます。ジョセフ・スミスは、マタイによる福音書第7章6節と7節およびニーフアイ第三書第14章6節と7節の翻訳に当たり、新たな深い解釈を示しました。その中で、救い主は弟子たちに、すでに天の国が到来しているのだから、全世界に出て行って、あらゆる者に悔い改めを告げよ、とされています。

また、王国の奥義を大切に保つべきこと、すなわち聖なるものを犬にやったり、真珠を豚に投げてやっても、足で踏みつけられるだけだから、決して与えてはならないことも教えられました。

さらにジョセフ・スミスは、弟子たち自身が維持できないような事柄を世は受け入れることはできない、したがって、弟子たちは自分たちの持つ真珠を世に与えてはならない、そうすれば世が向き直るかみついてくることもないだろう、それよりも、人々に神を求めるよう教えよ、と付け加えています。「そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。」(マタイ7:6-7; Ⅲニーフアイ14:6-7参照)

救い主は弟子たちに、王国の奥義を大切に保つように指示すると同時に、求め、捜し、見いだすよう、人々に教えよと指示されました。それによって、救い主は、私

たちが福音の知識を求める際の指針となる規範を示されたのでした。

その指示の後に続く教えは、ジョセフ・スミスが山上の垂訓を、救い主と弟子たちとの対話という形に翻訳した時、一層明確になりました。救い主が、新しく召された宣教師たちに、神との私的な交わりを努めて持つよう人々に教えよ、と言われた時、パレスチナにいた弟子たちは、改心しようとしないう人たちの反応を非常に心配しました。つまり、人々が「自分たちは神を知っているし、モーセのこともほかの予言者のことも聞いている。しかし、神は祈りを聞いてはくれないし、我々にはすでに救いに必要な律法も与えられており、それで十分である」と言うのを恐れたのです。

これに答えて、主は、父親のもとにパンや魚を求めてやって来る子供のたとえを使って、父親はその子の願いを必ず聞いてくれるに違いないと言われました。それならば、人々がご自分のもとへ戻って来ることをだれよりも望んでいる天父が、そうした願いをないがしろにされることがあるだろうか、と問いかけています。(Ⅲニーフアイ14：9—11参照)いずれにせよ、そういう人たちもいつかは王国の奥義を理解できるようになるかもしれません。しかし、完全に理解できるようになるためには、まず自分から神に近づき、みたまの声に慣れ親しむ必要があります。(Ⅰコリント2：9—14参照)

次にイエスは、この正しい裁きをせよという教えと、神の助けを求めよという教えを、ひとつにまとめ上げ、短く要約した教えとしました。それは一般に黄金律と呼ばれています。人に接するときには、自分も人からそうしてもらいたいと思うような前向きな方法で人に接すること、そして、自分自身を愛するように神と同胞とを愛するように努めること。それが黄金律の教えです。

問題との遭遇

私はこれまで、神の王国の会員になることによってあらゆる問題から逃れられるという考えを持っていたために、教会を離れていった人々を見てきました。そういう



**バプテスマを受けると、
それに伴って祝福が
もたらされるだけでなく、
様々な問題も
引き受けることになる。**

人たちは、教会に入った後で、教会員であるということは、様々な祝福の源とはなるものの、常に責任と義務とを伴い、ときには問題や試練をも甘んじて受けることである、と気づくのです。また、教会員は、時間を割き、最大の努力をするよう求められます。ときには、いらいらさせられるような人と付き合ったり、できればかわりを持ちたくないと思う人と付き合うこともあります。それは、主がパレスチナで、福音の網はあらゆる種類の魚を集めると言われたからです。(マタイ13：47参照)さらに、教会員であることによって、最善を尽くすことをその生き方として求められる場面が数多くあります。新しい会員の中には、できる限り、そうした問題を避けたいと思う人もい

ますが、彼らは、このような問題に立ち向かって初めて受けられる祝福を理解していないのです。

イエスは弟子たちに、このような問題も生じることを教えよ、と言われました。私たちは皆、折に触れて、そうした苦しい経験は成長のために不可欠なのだ、ということに認識する必要があります。事実、苦難が核になって、キリストを理解できるようになることがあるのです。私たちが最初の時点から、こうした問題を喜んで受け入れる覚悟ができていたら、もっと進歩成長することが可能だと思われれます。

いかなる分野においても、その道の一流の人物になるためには、まず血のにじむような努力と訓練が必要です。舞踏家であれ、野球選手であれ、音楽家であれ、見事な技能を苦もなく披露できるようになるまでには、熱のこもった練習と準備とを、信じられないほど繰り返しているのです。ですから、私も、運動選手や舞踏家がいかにも簡単そうにその技を披露しても、常にその裏には隠れた努力があることを思い出すように努めています。

同じことが、人生における成長と自由の関係でも言えます。キリストはその弟子たちを、自由を得させるために、ある意味で拘束しました。一方、ルシフェルは自分に従う者たちを、永遠に束縛しようとして、完全に「自由に」させたものと思われれます。

教会員の間に見られる 不完全さをありのままに受け入れる

救い主は、私たちが完全な者になろうと努力するときに、主をその導き手として信頼するようと言われていきます。門から入った者の中でも、道を見いだす者は少ないからであると、主はその弟子たちに教えられました。主はまた、新しい改宗者が模範とすべきは、主であって、人ではない、と言われてきました。おおかみ(教会の内部にも存在していることは明らかです)が、羊、つまり神の僕を装って近づいて来るからです。また、神の僕を装って来る利己的な者もいるのだから、常に識別の賜たまものを求めよう、とも言われました。その賜の助けによって、行動と心の思いが異なる者をはっきりと識別できるのです。

救い主がニーファイの民に教を説かれてから4世紀近くたって、予言者モルモンは息子のモロナイに1通の手紙を書きました。その中で救い主の説教のこの部分について、非常に興味深い意見を述べています。モロナイ書第7章の最初の19節は、実際には、ニーファイ第三書第14章16節から23節に関するモルモンの注釈という形になっています。この信仰と希望、愛に関する手紙の中で、善(人であれ、考え方であれ)と悪とを区別する方法を掘り下げて分析しています。

モルモンの言葉から、悪人であっても、表面的になら良い行ないだと思われる行動を取れないわけではない、とイエスは考えておられたことがわかります。行動を取る人の心に汚れがあれば、神の目から見て、その行動自体が良い行ないとして認められないのです。

「それは『その行いによって人の善悪が知れる。その行いが善ければその人も善い』と言う神の言葉を思い出したからである。

また、もし悪い人であるならば善を行うことはできないと神が仰せになった。このような悪い人は捧物さきげものをしても神に祈っても、もし真心からこれをしないなら何の役にも立たない。

その行いが義ただしいと認められないからである。

もし悪い人であるなら、捧物さきげものをしても惜み惜みするの



教会員は完全な存在であると
思い込むのではなく、
みたまの導きを
求めるようにする。

で、捧物をしないと同じことであるからその人は神の前に悪い人であると認められる。

またこれと同じであって、人が真心でなく祈る時は悪い事と認められる。神はこのような祈りを聞き届けたまわぬから何の役にも立たない。

それであるから、もし悪い人であるなら善を行うことができず、また善い捧物もしない。(モロナイ7:5-10。下線付加)

モルモンが記したこれらの聖句から、動機が不純であれば、人は祈ったり、捧物さきげものをしても罪ありとされることがわかります。ですから、モルモンの言葉を借りれば、私たちは最終的には、自分がどのような人物であったかによって裁かれるのであって、どのような

行動を取ってきたかによって裁かれるのではないということです。モルモンはさらに、善か悪かを最終的に見定めるものは、その行動(あるいは人)が人をどれほどキリストのみたまに近づけるかという点にあると言っています。「善を行えとすすめ、またキリストを信ぜよとすすめるものはみなキリストの権能によってその賜として来るのである……。」(モロナイ7:16)

キリストは説教の中で、神の裁きの座へ来て、自分は神のみ名によって予言をしたり、悪霊を追い出したり、神のみ名によって数多くの不思議な業を行ってきたのだから、当然神の王国へ入る資格があると主張する人々(IIIニーファイ14:21-23参照)について語っておられます。まだ若い宣教師だったころの私は、常々、この人々とは、神の教会の会員ではない人を指しているものと考えていました。ところが、ある日、ジョン・テイラー大管長が、この聖句で言っているのは教会の外部にいる人ではなく、むしろ教会の内部にいる人のことである、と教えているのを読んで驚きました。

「これは教会の外部の人のことを指しているのだろうか。そうではない。……これは、病いやを癒し、悪霊を追い出し、イエスのみ名によって数多くの不思議な業を行なっているあなたたち、末日聖徒のことを指しているのである。」(1879年1月6日、ソルトレークステーク大会での説教。ハイラム・M・スミス、ジャン・M・ショダ

イエスは私たちに、「地獄の門」に打ち勝てるよう、イエスの教えという岩の上に、家、すなわち私たちの生活を固く築くよう教えている。

ール「教義と聖約注解」pp.462—463より引用)

裁きの座で、表面的な行ないだけで自分は義人だと主張する人々に対して、主は次のようにお答えになることでしょう。「われは汝らを少しも知らず。罪悪を行う者よ、わが前を去れ。」(Ⅲニーフアイ14：23。下線付加)あるいはまた、予言者ジョセフ・スミスがマタイによる福音書のこの箇所を翻訳したように、「汝らはわれを知らず」とお答えになるかもしれません。

勝利を得る鍵は、神を知ることにあります。すなわち、神を愛し、神の創られたものを愛し、神が考えられるように考えるようになり、神が感じられるように感じるようになり、そして神が行なわれるように、自分も行なうようになることにあります。主は、十字架におかかりになる前の最後の祈りの中で、次のように教えられました。「永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることであります。」(ヨハネ17：3。下線付加)私たちが完全な意味で神を知るようになれば、永遠の生命、つまり、神の生命(モーセ7：35参照)にあずかることができます。それは、神と交わり、そのみたまと力を受け、み業に携わり、そして最終的に神と似た者になることによって、可能になるのです。

岩の上に築く

この説教は、イエスからの勧告の言葉で終わっています。イエスは、あらゆる人に、岩の上にその家(生活)を築くようにと言われたのです。(Ⅲニーフアイ14：24—27参照)これは実に、この説教で初めに語られたメッセージでもあります。

説教の冒頭の部分で、イエスは、その教えに耳を傾ける人々に向かって、主を信じる信仰、悔い改め、バプテスマ、聖霊の賜を授かることといった原則を説かれました。主はこの原則は、主の教義であると言われ、「これに基を置くものはわが岩の上に基を置くなれば、地獄の門はこれらの者に勝つことを得ず」(Ⅲニーフアイ11：31—39参照)と教えられたのです。この教えは、そこに集っていたニーフアイの民にとって、実に大きな意味のあるたとえでした。それと言うのも、ニーフアイの民はつい最近、自分たちの家だけでなく、営々として築き上げてきた文明の多くが、大水や風、地震のために、崩壊していく様子を見たばかりだったからです。そして今、

彼らはもっと確かな基盤の上に新しい文明を築き上げるようにと、主の命を受けたのです。

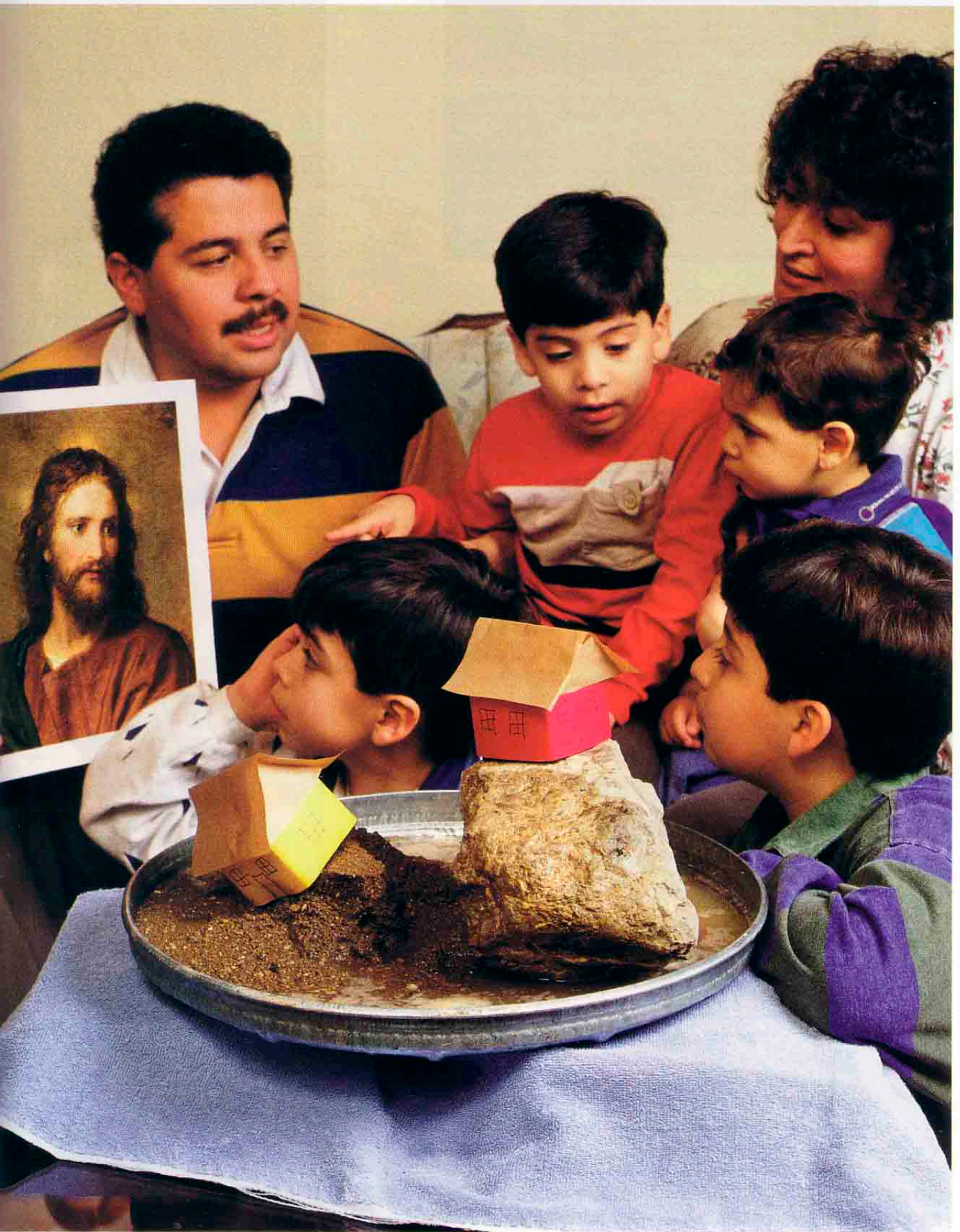
この説教の最後の章では、このような基本的な原則について別の表現で教えられているのです。すなわち、人を裁くのではなくて、みずから悔い改めるよう教え、奥義や秘義ではなくて、キリストを信じる信仰を持つよう教え、狭い門から入ることによってバプテスマを受け、そして、教会においても世においても善と悪を識別することができるようにみたまの導きを求めよ、と教えています。

ある意味では、この4つの原則は、いわばこの説教のすべてとも言えます。事実、この原則こそ福音の教えのすべてなのです。すなわち、キリストとその生き方を信じる信仰を持ち、一層キリストに似た者となるよう自分の生活を変える努力をし、バプテスマをはじめとする数々の儀式を通じて誓約を守り続ける過程で、神の助けを求め、聖霊の賜を通じて主の助けを受けることが、福音のすべてなのです。

教育者として私はこれまで、自分の目覚めている時間の90パーセント近くを、様々な考え方や思想の研究に使ってきました。そして、イエスの教えの広さと深さに驚くことがたびたびでした。自分の研究の過程で、どんな疑問に突き当たり、どんなシステムを考え出しても、そのほとんどがすでに主の広大な教えの中で扱われていると思われるものでした。

私がさらに感動を感じるのは、主の福音の中心となる教えが実に簡潔で明瞭である点です。たとえ、この簡潔な基盤の上に築かれている神学上の体系が取り去られたとしても、この基盤だけは、ひとつの根本的な原則に従っていけば見いだすことができます。その原則とは、私たちが広範にわたって熱心に探求すれば、御父と救い主を知ることができるという原則です。

そのほかの教えは、皆この根本的な原則が元になっているにすぎません。この原則こそ、キリストがニーフアイの民に教えられた偉大な説教の主題であり、私たち教会員を強めてくれるものです。この原則に従っていれば、私たちは皆、大水や風、そして地獄の門が迫ろうとも、滅ぼされることなく、固く立つことができるのです。□



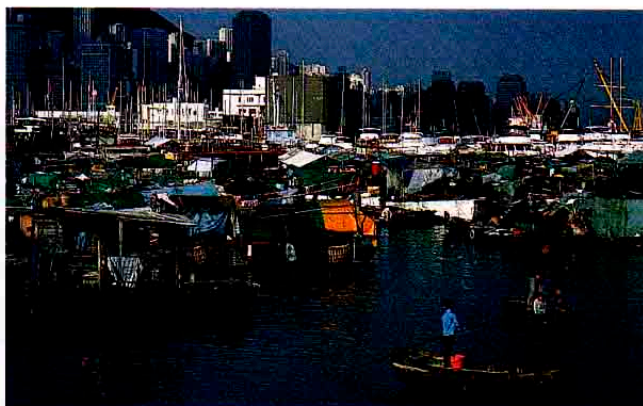


PHOTO BY FARRELL GREHAN; COURTESY OF FFG INTERNATIONAL

香港では古い時代の知恵と、現代のテクノロジーと、
目を見はる自然美が、混然一体となっています。
しかし、その中であって
まことの真珠の輝きを放つのは、そこに住む人々です。

東洋の真珠

ケリーン・リックス

トニー・ウォン兄弟の両親が共産党
支配下の中国を逃れて香港に移り住ん
だのは、彼の生まれる前のことでした。

父親の働き口が見つから
ず、生活に窮した彼の両親は、互いの役割を交換
することにしました。ウ
ォン兄弟はこう言います。
「父が私たちにミルクを
飲ませ、おむつを替えて、
母が働きに出たのです。」

母親の賃金は1日数ド
ルという少額で、家族は
かろうじて飢えをしのぎ、
粗末な家の家賃を払うだ
けで精一杯でした。ウォ



ン兄弟は当時を振り返ってこう言いま
す。「扇風機も買えないほどの貧しい
暮らしでした。」夏の気温が32度まで

上がり、湿度が100パー
セント近くになる香港で
は、扇風機は必需品なの
です。

それもこれも、宣教師
の訪問によってすべて変
わりました。家族は福音
を学び、当時8歳のトニ
ーは、両親と共に1960年
にバプテスマを受けまし
た。(妹も8歳になって
バプテスマを受けまし
た)家族は苦しい経済の

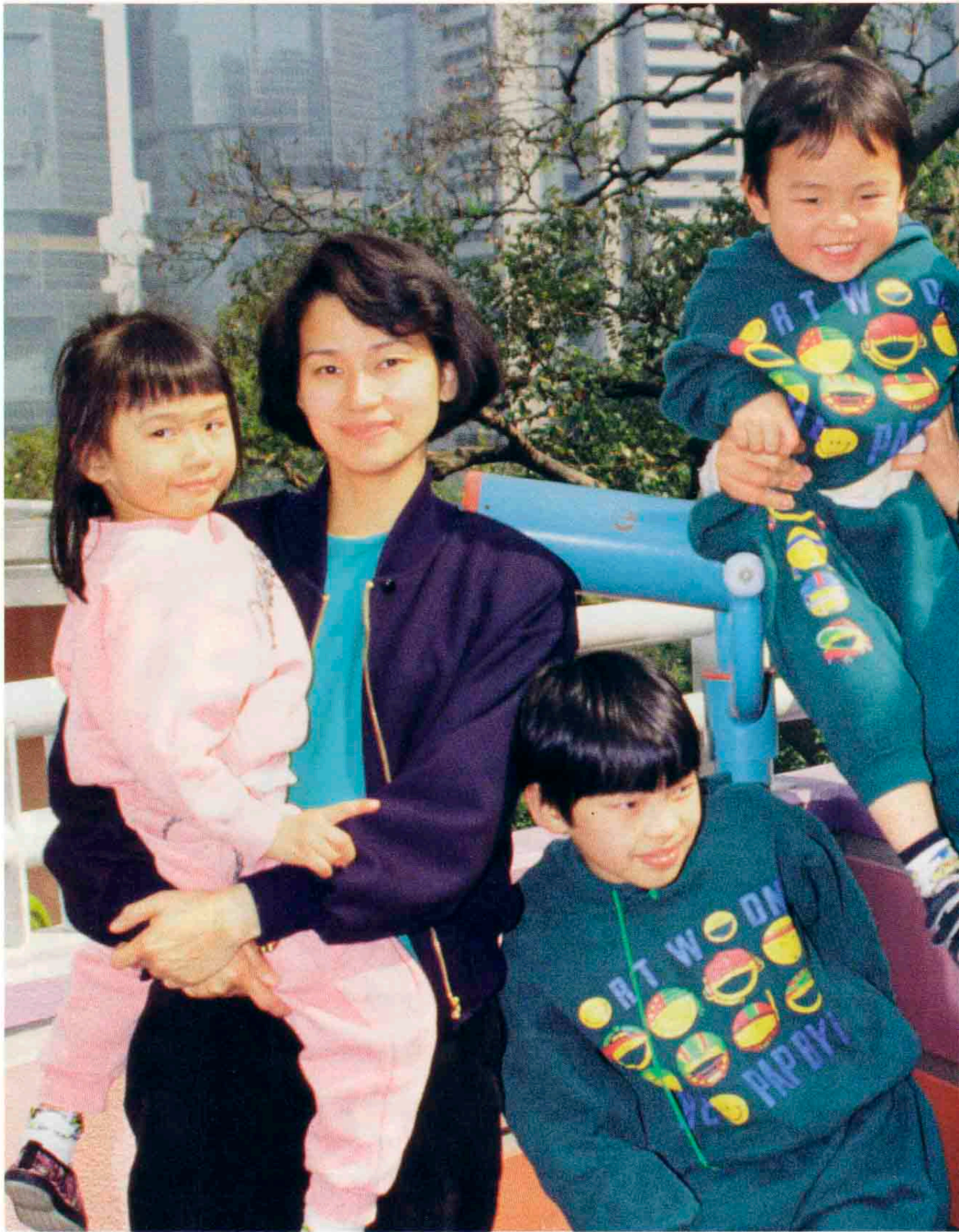
(上)どのような将来が待つかわからな
い香港で、福音の中に希望を見だし
たトニー・ウォン兄弟。(右)家族で写

真に収まるクォック・カム・ティン兄
弟。福音は日曜日だけの宗教ではない
と、彼は青少年に教えている。

PHOTOGRAPH BY LUISA BERG









PHOTOGRAPH BY LISA BERG

(左)スタンレー・ワン兄弟とその家族。彼は地区再活性化コーディネーターとして、新会員がフェロウシップを受け、各自のワード部になじめるように見守

る責任を受けている。(下)10代で教会に改宗した当時、キャメル・ロク姉妹にはワード部の教会員たちが心の支えだった。

中から喜んで什分の一を納めました。ウォン兄弟はこう言っています。「それから2カ月もしないうちに母はもうひとつの仕事を見つけ、待望の扇風機が買えるようになったのです。その後も主は私たち家族を祝福し続けてくださいました。」

香港は今も昔も、子供が生まれ育つにはユニークな場所だと言えるでしょう。昔その自然の美しさとまれに見る可能性を見いだした旅人たちは、この地を「東洋の真珠」と命名しました。ここでは古い時代の知恵と現代のテクノロジーが不思議に混じり合っています。田園地帯は静かで緑が青々と繁り、都市部は活気にあふれ成長を続けています。

しかし、この中であってまことの真珠と呼ぶにふさわしいのは、そこに住む人々です。彼らは、豊かな伝統や習

慣に彩られた歴史に洗練され、様々なチャレンジと可能性を秘めた輝く未来を持っています。

中国文明は歴史を4,000年もさかのぼる世界最古の文明のひとつです。家族と従順、敬意が重んじられ、社会の規範となっているここでは、福音の教えに違和感はありません。香港住民の多くは祖先崇拝の要素を色濃く持つ道教、儒教、仏教のいずれかを実践しています。

トニー・ウォン兄弟のように末日聖徒2世として教会で育った会員は、香港ではまだ例外的存在です。教会員のほとんどは改宗者で、多くは「新しい宗教」を理解できない家族との間に問題を抱えています。

10代で改宗したキャメル・ロク姉妹は「大変でした」と、その当時のことを話してくれます。家族は毎週教会に



PHOTOGRAPH BY KELLENE ROCKS

.....

(下)警察官として高い地位にあるチャン・ユー・サン兄弟は、同僚たちにも福音を伝えたいと強く願っている。
(右)夜学生に教えるキャロライン・ク

オック姉妹。彼女は、働きながらさらに高い教育を受けたいと望む教会員のために、夜間学校を開校した。

通うことは認めてくれたものの、キャメル姉妹はひとりで自分の霊性を高め、福音を学ぼうと努力することに孤独感を覚えることが多かったのです。

「ワード部の友達の助けなしでは、今までやってこれなかったと思います。日曜日の集会で本当に強められて、次の1週間を乗り切ることができたのです。」

キャメル姉妹と夫のガリー兄弟は共に帰還宣教師で、今は互いに励まし合い、娘を福音の教えを基にして育てるのを楽しみにしています。

ほかの夫婦も思いは同じです。4人の子供を持つチャン・ユー・サン監督と妻のキット・フォン姉妹は福音と福音が与えてくれた祝福に深く感謝しています。

17年前のこと、当時24歳の巡査だったチャン監督は、末日聖徒イエス・キ

リスト教会の宣教師が教えていた英会話クラスに出席して、福音を知りました。

チャン監督はその時のことを振り返り、「私には福音が本当に素晴らしいものに思えました」と話しています。「そのころ神の存在を信じていませんでした。しかし、宣教師に家族は永遠だと教えられて、それを実現するためにはどんな犠牲もいとわないと強く心に思いました。」

バプテスマ以来、彼の人生は大きく変わりました。半年もたたないうちに職場で昇進しました。その夏は専任宣教師と共に働き、福音を人々に教えました。2年後、その時の求道者のひとりが、手紙で彼女のワード部の礼拝堂建設のため援助を依頼してきました。彼はお金を送り、彼女との旧交を温めました。ふたりは1年後に結婚しました。



PHOTOGRAPH BY KELLENE ROCKS

PHOTOGRAPH BY LUISA BERG



香港における教会の歴史

- 1852年8月——宣教師がアジアに初めて派遣される。3人の宣教師は、1853年4月27日、香港に到着し、4カ月滞在して帰米。
- 1949年7月14日——十二使徒定員会のマシュー・カウリー長老来訪。ピクトリア・ピークに立ち、伝道活動の成功のために祈りを捧げる。
- 1950年2月25日——1852年以来初めての宣教師が香港に到着。伝道を開始する。
- 1950年12月31日——3人がバプテス

- マを受ける。1年以内に専任宣教師の数8人に増加。朝鮮戦争勃発で政情不安となり、伝道活動は中断。
- 1955年——南極東伝道部が組織される。新伝道部には香港、台湾、フィリピンなど東南アジア全域が含まれた。
- 1959年5月——伝道部専任宣教師の数102人。そのうち地元出身者は12人を数えた。
- 1965年——香港の8つの支部の中で6つの支部が地元の中国人神権者によって管理される。12月、中国語版「モ

- ルモン経」出版。
- 1966年——新界の元朗市に香港初の末日聖徒の礼拝堂が完成。
- 1969年11月1日——香港・台湾伝道部が新たに組織される。
- 1971年1月1日——香港・台湾伝道部が香港伝道部と台湾伝道部に分割。
- 1974年——中国語版「教義と聖約」出版。
- 1975年8月——スペンサー・W・キンボール大管長が地域総大会のために香港を訪問。
- 1976年4月25日——香港伝道部の一部が、初のステーク部として3,410人の会員と共に独立。
- 1980年5月——香港ステーク部分割。ふたつのステーク部の会員数は合計9,000人に上る。
- 1984年11月——さらにふたつのステーク部が新たに組織され、教会員数は1万3,000人に。(この年、中国語を話す会員のために台湾の台北神殿奉献される)
- 1990年——教会の成長は続き、現在香港の会員数は約1万7,000人。4つのステーク部、23のワード部、5つの支部が組織されている。



PHOTOGRAPH BY KELLENE RICKS

チャン監督はこう言っています。「福音が与えてくれた最大の祝福は、私の家族です。」

祝福を分かち合う

チャン監督の目標のひとつは、その祝福を分かち合うことです。昨年、彼は宣教師たちを警察に招き、月例訓練集会で家庭に焦点を当てたプレゼンテーションをしてもらいました。訓練では家族の教育、福祉、家族会議や子供との個人面接などが取り上げられ、家庭の夕べも紹介されました。その結果、チャン監督の同僚のひとりが改宗し、ほかの人々も関心を示すようになりました。

チャン家の長男のリー・ハン兄弟は1997年には19歳になります。彼は伝道に出る計画を立て、もう貯金も始めています。香港における伝道のむずかしさのひとつに中国語そのものがあります。広東語を中心にたくさんの方言があり、その一つ一つがそれぞれ異なる音と声調から成り立っていて、成人してからの学習には困難が伴います。そのため、その中国語を母国語とする宣教師が最も効果的に伝道できるということになります。この数年間、香港出身の宣教師の数は全体の3分の1から2分の1以上の割合に増大しています。会員の増加に伴い、この割合もさらに増えると予想されます。

もうひとつの問題は、この地域に限ったことではありませんが、改宗者の定着とお休み会員の活性化です。この問題の解決のためにスタンレー・ワン兄弟が地区再活性化コーディネーターとして召され、それぞれのステーク部伝道部長やワード部伝道主任と調整しながら、新会員が確実にバプテスマ後のレッスンを受け、ワード部に活発に集えるように指導しています。

ワン兄弟はこう言っています。「私たちが関心を持っているのは数字ではなく、人そのものです。新しくバプテスマを受けた人の名前はすべてファイルされており、神権を受けたか、責任に召されているか、ホームティーチャーの訪問を受けているかまでチェックしています。」

神権定員会と補助組織は毎月お休み会員をひとり選んで接触を図り、その結果をワード部評議会に報告するよう指示を受けています。

それに加えてホームティーチングにも力を入れています。ワン兄弟は言います。「これは私たちにとってはチャレンジです。」問題は香港の住宅事情です。幾世代も狭い家に同居している家庭では、家族がすぐ隣でマージャンに興じたりテレビを見たりしている中で訪問しなければなりません。このためホームティーチングは近くの公園や教会で行なわれることもあります。

教会教育部のパトリック・チュック

兄弟は、改宗者が増え霊的に成長するにつれて、香港の教会も発展していると言います。「人の成長と似ています。子供は初め何もかも両親に依存しています。しかし成長するにつれてひとりでできることが増えていきます。」

香港の教会は大人のレベルに近づきつつあります。若い人々の中には留学経験者が多く、帰還宣教師の数も飛躍的に伸びています。彼らの献身と経験が香港における教会の発展のために大いに役立つ時期が来るでしょう。今は将来のために人が備えられている時期なのです。」

チュック兄弟自身も経験豊富で献身的な改宗者のひとりです。改宗後、伝道を経てアイダホ州レックスバークのリックスカレッジで学び、その後ブリガム・ヤング大学を卒業しました。アメリカで就職しようと計画していた彼は、故国に帰るよう強く駆り立てるものを感じて帰国したのでした。

「天のお父様が私たちにどこかで何かをしてほしいとお望みになるときは、必ずそうさせてくださるのです。」チュック兄弟は笑いながら言います。「本当は帰ってきたくありませんでしたし、帰国後のこの数年は楽ではありませんでした。しかし、私が今ここにおいてこの仕事をするのが主のみこころにかなうことに、疑いの余地はありません。」

.....

(下)世界各地の都市でも見られるように、香港でも生産物が青空市場で売られている。(右)若い人々の成長体験や

献身は教会に役立っている、と語る教会教育部の講師、パトリック・チュック兄弟。

..... 新旧のバランス

香港の青少年にとって、新旧の価値観の入り交じった社会でバランスを取るの容易ではありません。家族への忠誠心を重んじる伝統的社会にあって、若者は本能的と言えるほど両親によく従います。その反面、変わりゆく世界と歩調を合わせていくことにも強い関心を持ち、両者のはざまに悩んでいます。

教会の指導者たちは、青少年がバランスの取れた生活を実現できるように助けたいと願っています。教会教育部のセミナーとインスティテュートのプログラムは、1969年に香港で始まり、青少年や独身成人が価値観と信仰を同じくする仲間と交流できる場を提供しています。地域教会教育部副部長代理を務めるクォック・カム・ティン兄弟

は、若い人々はこのようなクラスで、福音は日曜日だけのものでないことを学んでいると言います。

クォック兄弟は次のように言います。「1週間を通して福音を学び、仲間の友情と助けを受けることができます。クラスでは人生の目的、つまり私たちがなぜここにいるのかということを理解できるように助けています。皆が永遠の観点から物事を考え、戒めを守る強さを持ち、互いに愛し助け合って福音を分かち合えるように努力しています。」

..... 一人一人に備わった力

物質的、金銭的な事柄に心を奪われがちな世の中にあって、このような目標を達成するのは容易ではありません。

ブリガム・ヤング大学を卒業したキ



PHOTOGRAPH BY KELLENE RICKS

PHOTOGRAPH BY LISA BERG



ストを信じる信仰についてでした。
移民するつもりかと尋ねられたら、
私の答えはノーです。人々は心配し恐

れていますが、それは福音を忘れてい
るからです。私たちには主の助けがあ
ります。天父は何もかもご存じであり、

すべては主のみ手の内にあります。福
音はそのような希望と確信を与えてく
れるのです。」□

香港ハイライト

領土——現在香港はイギリス領で、中国の南端約1,000平方キロにわたって広がっています。物理的には広東州に接する中国半島の尖端とふたつの比較的大きな島、200以上の小さな島々から成り、変化に富んでいます。

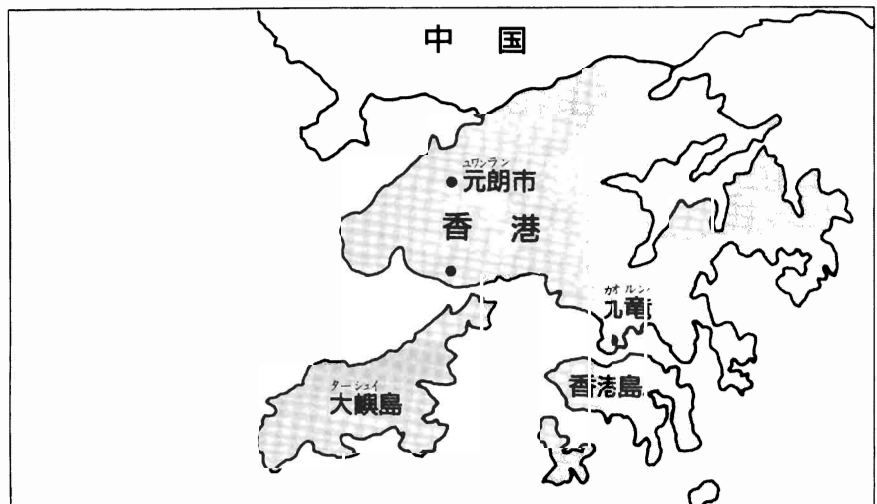
歴史——アヘン戦争後、中国は1842年に、香港島をイギリスに割譲しました。その後1860年には九竜地区が植民地に加えられ、1898年には九竜から中国国境に至る新界地区が99年間の租借地となりました。この租借契約は1997年に満了します。この租借契約は1997年7月1日をもって香港を中国の特別行政地区とする合意書に調印し、香港の中国への返還が確定しました。合意書には返還後50年間は社会的、経済的、法的システムなどは現状のまま維持されることがうたわれています。

経済——「香る港」という名のとおり、良港を生かした船舶、商業、工業が香港の基幹産業となっています。香

港は自由貿易港で、輸出入品には関税が課せられません。人口比率から言っ
て、香港は世界屈指の貿易国に匹敵す
る実績を上げており、人口の36パー
セントは製造業に従事しています。観光
もまた大きな収入源になっています。

住民——第二次世界大戦の日本占領中

に、人口は60万人まで減ったものの、
戦後大量の人口移入があり、現在では
580万人、1平方キロ当たり4,318人
という人口密度に達しています。この
うち60パーセント以上が都市部に集
まっています。また、中国系が人口の約98
パーセントを占めています。□





Lucas

Steph

Kris

Tech

Med

Ann

Gen

Adm

A HISTORY OF THE UNITED STATES
DAVIDSON & FORAN



人に影響を与える

ジェリー・クリステンセン

だれでもときには、自分は大切な人間だと感じたり、世界中の人々の記憶にとどまるようなこと、つまり社会に大きな影響を与えて歴史の流れを変え、語り継がれるようなことをしたいと思ったりするのではないのでしょうか。少なくとも10代のころの私は、そんなふうに思っていました。

もちろん、お金持ちや有名人になること、科学的な大発見をすること、月面に着陸する最初の女性になること、合衆国大統領になることなど、いくらでも夢を持つことはできました。しかしどういうわけか、そのようなことは少なくとも自分には起こらないだろうとわかっていました。

私は、いわゆる目立つ人間ではありませんでした。人に従うのは上手でしたが、リーダーになるタイプではありませんでした。卒業生総代に選ばれたり、コンテストやタレントショーで何か賞をもらったりすることは到底あり得ないことでした。スポーツもまるで駄目でした。努力しなかったとか、その気がなかったというのではなく、とにかく私は、恥ずかしがり屋で自分に自信がなかったのです。そんな私が、一体どうやって人に影響を与えるなどということができのでしょうか。

私は母に、どうしたら世の中に影響を与えられると思

うか尋ねてみました。母は、悪い成績を取らずに高校を卒業し、大学に行くようになれば、きっと影響力のある人間になれると言ってくれました。確かにそうだと思いますが、自分の考えていたこととは違っていました。

思いあぐね、希望を失いかけた私は、主に心に向けました。特別な才能や資格がなくても、価値あることをしているという気持ちになれる何かを見いだせるよう、主に助けを求めて祈りました。あまり劇的なことではなく、自分の能力に合った何かを見つけられるように。

それから間もなく、とても素晴らしいアイデアが浮かびました。靈感によってしか答えは得られないと思ったのは正しかったのです。決して自分ひとりでは考えつかないでしょう。そのアイデアというのは、自分が接する人々の名前を全部覚えて、見かけるたびに名前を呼んであいさつするということでした。

私はまず、近所の人から始めて、その家の子供やペットに至るまで全員の名前を覚えました。それから、ワード部の人全員の名前を覚えました。それがうまくいった後は、高校でも同じことを始めました。

私の学校は大きな町にあり、生徒数も多かったため、大分時間がかかりました。しかし私はやり遂げました。人種や社会的背景の違いは気に留めませんでした。最初

周りの人々を知ろうと努力するうちに、彼らを名前だけでなく、「FRIEND」(友達)として呼べることに気づきました。

のうちは、知らない人の名前を呼んであいさつすることに戸惑いを覚えました。間違っただけで名前を呼んだりしたこともたびたびあり、恥ずかしい思いをしました。しかし、続けていくうちに、上手になっていきました。

やがて、1日で何人の名前を覚えられるかという、ゲームのようになってきました。げんな顔で「生徒会の選挙か何かに出るの」と聞いてくる人も、たまにいました。しかし、大抵の人は快く思ってくれているようでした。

これによって影響を与えることができたのでしょうか。私はできたと思います。ある時、ワード部で最高齢の

パートン兄弟が私に、「お嬢さん、このワード部でわしの名前を知っているのは、あんただけだと思うよ。あんたがわしのことを心に留め、話しかけてくれるのは、実にうれしいよ」と、言ってくれました。

学校ではこんなこともありました。ある日、私のロッカーに匿名のメモが張ってあり、こう書いてあったのです。「きょう、ぼくにあいさつしてくれてありがとう。ぼくは新しく転入してきたばかりで、ぼくの名前を知ってる人がいるなんて思ってもみなかったよ。温かく迎えてくれてありがとう。」

以前は親しみにくく、とっつきにくいと思っていた人も、好きになることができました。自分から名前を呼んで、好意を持って接し始めると、その人たちも好意を持って応じてくれることが多いのです。

しかし、一番大きな影響を受けたのは、自分自身でした。私の態度はあらゆる面で変わりました。もう自分が何の変哲もない人間だなどとは感じなくなりました。自分は特別な人間で、人の役に立つ、価値あることを行っているのだと感じられるようになりました。私が相手の名前を呼んで、笑顔であいさつすると、彼らの心が明るくなるのがわかりました。彼らにとっては小さな影響だったかもしれませんが、しかし、主の助けによって、私にとっては大きな影響となったのです。□





「アルマの改宗」ゲーリー・カツラ画

息子アルマとモーサヤの4人の息子たちが歩きまわって、「神の教会を亡ぼし……でいた。このようにかれらが……歩きまわっていた時、主の使つかいがかれらに現われ、……ちようど雷のような声を立てて物を言ったので、……かれらは地上に倒れるばかりに驚おどろいた。(モーサヤ27：10-12)



中 国の南端にあって、約1,000平方キロの地域を占めるイギリス領香港は、変化してやまない社会の動きに遅れまいとする気運と、古くからの伝統との間に調和を保つという課題を担っている。香港の末日聖徒たちはどのようにこの問題と取り組み、近い将来の中国政府への返還に向けて準備が進む中で、どのようにその不安に立ち向かっているだろうか。(本誌「東洋の真珠」p. 34参照)

刈り入れは終わり 夏はすでに過ぎ去りぬ

アジア北地域会長会第一副会長
韓仁相

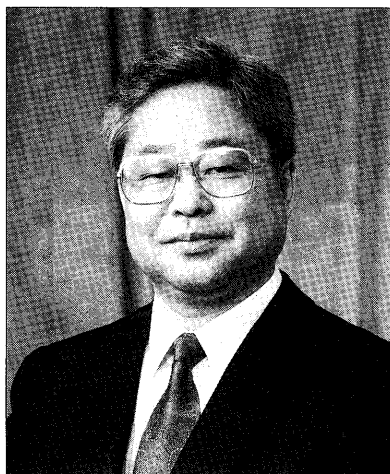
東西を結ぶ道が広く開かれ、交通手段の発達した現代では、1日もあれば地球のどこにでも行くことができます。ですから、地域ごとの伝統や文化の特性もそれほど珍しいものと考えられなくなりました。しかしながら、東洋で食糧と言えば、やはり小麦で作ったものよりも、まず米やご飯を思い浮かべるのではないのでしょうか。

私たちのこのような米に対する観念や生活風土の影響により、今でも農業と言えば稲作を、豊作と言えば米がたくさん収穫できた年を指して言うのではないのでしょうか。

この米のために、農家の人々が水田に水を張り、田植えをし、暑さや梅雨の中で稲を育てた夏が昨日のようです。早い時期に田植えを済ませた所では、すでに米を収穫し、新米のご飯を食べるそうですが、普通の品種の稲は、今黄金の輝きを放ちながら恥ずかしそうに頭を垂れて秋の収穫を待っています。

ことに今年の陰暦の暦は早く、8月に立秋が過ぎ、8月末が処暑(陰暦による季節区分のひとつ)でした。さらに今月は陰暦による8月15日のお盆があります。

韓国や中国など東洋の諸国では、お盆(韓国語で「チュソク」)を一年の中でも大きな祭りとしてその年に取れた新しい穀物で食事を用意し、先祖を思



い起こし、神に感謝し、この日を楽しみます。

ご承知のように秋の収穫は、実際に田畑で汗を流しながら種をまき、肥料を与え、手入れをして働いた人たちに特別な喜びをもたらします。しかしここで、まったく農業に携わらなかった人たちにも感謝の気持ちと喜びを感じていただきたいと思います。

黄金色の田と、頭を垂れた稲、汗を流しながら働いた多くの人々について考えながら、主がおっしゃた多くの収穫に思いをはせてみてはいかがでしょうか。

箴言には「**あ**悪しき者の得る報いはむなく、正義を**ま**播く者は確かな報いを得る」(11:18)という言葉があります。

また、ガラテヤ人への手紙には、「まちがってはいけない、神は侮られるようなかたではない。人は自分のまいたものを、刈り取ることになる」(6:7)と記されています。

私たちはまさに、植えたとおりに収穫を得るのです。

この収穫について、主は最後の審判のたとえの中で、何度も言及されました。また、今の時代にも予言者ジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリに、主は次のように言われました。

「わが子らよ、善を行うことをおそるなかれ。何事にも汝ら**な**蒔くところのものをまた刈り入るべければなり。この故に、汝ら善の種を蒔かばそのむく**い**としてまた善の実を取り入るべし。」(教義と聖約6:33)

この末の日にキリストに従うと決心した私たち末日聖徒は、正しい行ないを続けながらこの世を生き、キリストが自らを犠牲にして開いてくださった救いの門に入り、永遠に生きることを願っています。

行ないという種をまき、育てるならば、立派な収穫につながります。私たちが種をまき、育てていくこと、すなわち正しい行ないを続けていけば、その時流した汗、つまり努力と苦労が貴い収穫をもたらすのです。自分自身をもう一度吟味し、本当に行ないを伴

った聖徒となれるよう努めていただきたいと思います。

聖典を読むという思いは、すばらしいものです。しかし思っているだけでは聖典は読めません。行なわなければならぬのです。私たちは、実際に聖典を読むという行ないが伴って初めて、神のみたまを受け、聖徒として生涯を送り、永遠に対する確信を持つようになります。そうすれば直面するこの世の困難や苦痛にも打ち勝てるでしょう。

祈りたいという思い、伝道の業に携わりたいという思い、戒めを守りたいという思い、純潔の律法を守りたいという思い。このような思いだけで、私たちが期待する秋の収穫を得られるで

しょうか。「小なる事より偉大なる事に起る。」(教義と聖約64:33)最初は少しずつ始めればよいでしょう。身近なところから始めるのです。

行ないを特に強調したヤコブの言葉を見てみましょう。

「わたしの兄弟たちよ。ある人が自分には信仰があると称していても、もし行いがなかったら、なんの役に立つか。その信仰は彼を救うことができるか。

ある兄弟または姉妹が裸でいて、その日の食物にもこと欠いている場合、あなたがたのうち、だれかが、『安らかに行きなさい。暖まって、食べ飽きなさい』と言うだけで、そのからだに必要なものを何ひとつ与えなかったと

したら、なんの役に立つか。

信仰も、それと同様に、行いを伴わなければ、それだけでは死んだものである。」(ヤコブの手紙2:14-17)

兄弟姉妹の皆さん、夏は過ぎました。間もなく秋の収穫が始まり、それもやがて終わるでしょう。私たちが泣き叫びながら「刈り入れは終り夏はすでに過ぎ去りぬ、われは救われず」(教義と聖約56:16)と言わなくてもよいように今から決意を新たに立ち上がり、キリストの教えに従って良い行ないを積み重ね始める必要があります。

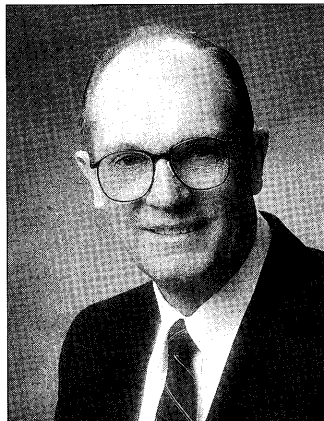
神は生きておられ、イエスはキリストであり、この教会はイエス・キリストの真実の教会であることを証いたします。□

チャーチニュース

ローカル

ふたりの教会幹部、 七十人会長会に召される

ディディエ長老とポーター長老、8月15日付で新たな召しを受ける



大管長会は、チャールズ・ディディエ長老とL・アルディン・ポーター長老を8月15日付で七十人会長会に召すことを明らかにした。この召しは、10月に七十人会長会のマリオン・D・ハンクス長老とロバート・L・バックマン長老が名誉教会幹部に任命されるのに伴って行なわれるもの

である。

ディディエ長老(56歳)とポーター長老(60歳)は、現在共に七十人第一定員会会員を務めている。

ディディエ長老は1991年10月以来、ユタ北地域会長会副会長を務め、教科課程管理部部長補佐としても働いている。ポーター長老は1989年10月以来、

ユタ南地域会長会会長を務め、教会伝道管理部部長補佐としても働いている。

七十人会長会の新しい召しを受けて、ディディエ長老は教会神権部部長に、ポーター長老は教会伝道管理部部長となる。

ディディエ長老は1975年10月3日、七十人第一定員会会員に支持された。

召しを受けた時は地区代表として働いていた。1970年から1973年にはフランス・スイス伝道部の伝道部長を務めた。また、ベルギーのリエージュ支部支部長としても働いた。

ディディエ長老は1935年10月5日、ベルギーのイクセルで、アンドレ・ディディエ、ガブリエラ・コルパート・ディディエ夫妻の間に生まれた。1957年に教会に改宗し、リエージュ大学を卒業して経済学学士号を受け、ベルギー航空予備軍の士官となった。

1961年10月14日、リエージュ出身のルシー・ロドメ姉妹と結婚し、ふたりの息子に恵まれている。

専任の教会の召しを受ける以前は、ドイツ、フランクフルトにある教会の翻訳部およびディストリビューションセンターで働き、続いて、リエージュにある同センターを管理していた。フラマン語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、英語の5カ国語に堪能である。

5年前に教会幹部に召されたポーター長老は、1989年4月1日、七十人第二定員会が組織された際、同定員会会員として支持された。そして1991年4月6日、七十人第一定員会会員となった。

ポーター長老は教会幹部に召された時、ルイジアナ州パトナージュ伝道部伝道部長を務めており、1987年7月まで引き続きその召しを果たした。それ以前は、アイダホ州メリディアンステーク部祝福師、アイダホ州ボイシ北ステーク部ステーク部長、アイダホ州ボイシ神殿副神殿長を務めた。

ポーター長老は1931年6月30日、ソルトレークシティでJ・ロイド・ポーター、レボン・ヘイワード・ポーター夫妻の間に生まれた。青年時代は、1950年から1952年に合衆国中央西部諸州伝道部で専任宣教師として奉仕した。1953年2月19日、テキサス州ヒューストン出身のシャーリー・パーマー姉妹とアイダホフォールズ神殿で結婚し、6人の子供に恵まれている。ブリガム・ヤング大学卒業。教会の専任の召しを受ける前は、財務管理会社取締役であった。「チャーチニュース」1992年6月27日付

若い女性・世界の祭典

「光の中を歩む」

中央若い女性会長会



末 日聖徒イエス・キリスト教会の若い女性の皆さんは、1992年11月21日の土曜日、世界の祭典に参加していただきたいと思います。この祭典は、奉仕を通じてキリストの光を分かち合い、世界中の姉妹たちのきずなを感じ、若い女性のプログラムで教えられている原則をさらによく理解する機会を、末日聖徒の若い女性一人一人に提供するものです。また、私たちが生涯にわたって人々を助けるという心構えを築くのに役立つでしょう。若い女性のロゴ(たいまつ)が、この祭典のシンボルです。

今回の若い女性・世界の祭典のテーマは「光の中を歩む」です。(イザヤ2:5;ヨハネ1:7参照)若い女性とその指導者は、自分たちの地域で、キリストを信じる者としてふさわしい奉仕活動を選び、祭典の一環として、11月21日にその活動を行なってください。このような活動を実施するには、前もって周到な計画を立てる必要があります。

奉仕は、すでに若い女性の個人の進歩プログラムに含まれていますが、この活動がきっかけとなって、奉仕にさ

らに重点を置いた1年を送ることができるとでしょう。活動を行なった後の夕方か夜に、若い女性と両親、若い女性の指導者、神権指導者は、ワード部またはステーク部で祭典のプログラムのために集会を開くことになっています。この集会では、奉仕の喜びに焦点を置き、若い女性たちが来年1年を通じて光を人々に分かち合うように、励ましてください。

祭典のプログラムの中で、若い女性たちは聖典に基づいた今回のテーマを、目に見える形で表現することになっています。地元の神権指導者の承認を得たうえで、テーマをいろいろな方法で表現することができます。光の道を作ったり、星形を切り抜いたり、懐中電灯や鏡を利用したり、様々な方法があります。ただし、ろうそくの使用は禁じられています。発表の際、若い女性の信条の色を用いた旗やリボンを使うこともできます。参加する若い女性一人一人が、自分の光をほかの人の光と分かち合うとともに、そうした象徴を通して個人の貢献の大切さを理解できるようにしてください。□

教会初期の改宗者 奈良富士哉兄弟死去

1930年から1934年まで、当時のヒーバー・J・グラント大管長から任命を受けて日本支部初代管理長老を務め、1973年に日本でふたり目の祝福師に召された奈良富士哉兄弟が、7月2日に死亡した。享年94歳。

告別式は7月4日、東京北ステーク部豊島ワード部で、アジア北地域会長兼会長W・ユージン・ハンセン長老、杉澤廣行東京北ステーク部ステーク部長ほか大勢が参列して行なわれた。

77年に及ぶ奈良兄弟の信仰生活には、数々の出来事があった。24年間の伝道活動停止の時代、奈良夫妻は4畳半2

間の会社の寮に、同寮に住む子供たちを招いて非公式な子供日曜学校を行なった。人数は次第が増えて100人を超え、クリスマス時には近くの小学校の一室を借りたこともあった。

その後、日本の教会の成長期には会員たちに高額教会堂や神殿の建築基金、ワード部予算への献金がチャレンジされたが、奈良夫妻はそろって「必要ならば全部出します」と監督に言明するほどの熱意を示した。

1965年から1979年までに8回を数えたハワイ神殿訪問にも、すべて参加している。

夫妻は1980年の東京神殿献堂時から2年間神殿宣教師として奉仕し、解任後は共に毎週1回神殿で奉仕を続けた。この奉仕は昨年暮れ奈良兄弟が入院するまで9年間続いた。

妻である源子姉妹(91歳)は、富士哉兄弟の人柄を評して「68年間の結婚生活で、人を悪く言うことが一度もありませんでした。何度か詐欺にも遭いましたが、それでも人を疑うことをしない人でした」と語っている。

以下に紹介するのは奈良兄弟の生前の証である。



写真上——奈良兄弟の告別式で話すW・ユージン・ハンセン長老(左)



写真右——1975年8月、来日したスペンサー・W・キンボール大管長(左)と奈良兄弟

激動の時代を信仰と共に

奈良富士哉

末日聖徒イエス・キリスト教会の存在を私のはっきり知りましたのは、北海道札幌市に両親と共に住んでいた12歳の時、すなわち1911年(明治44年)9月のことです。小学校の友達に、「アメリカ人の宣教師のいるキリスト教会があるから行って見ないかととても面白いよ」と勧められたので、教会に行く気になったのです。しかし、教会は私の家から歩いて40分以上もかかる、子供の足で歩くには大変遠い所にありました。

当時の札幌市にはまだ市街を走る電車もなく、途中には様々な教派のキリスト教会がありましたが、末日聖徒イエス・キリスト教会以外の教会には全然行く気がなかったのは、まことに不思議なことかと思われません。

父は宮内庁の官吏かんりでしたから転勤が多く、1913年(大正2年)4月、同じ官吏である長兄を頼りに単身で東京に来て、元東京市牛込区薬王寺町にあった日本東京伝道本部で開かれていた日曜学校に一生徒として集っていました。札幌にいた時と同じように、毎日曜日欠かさず教会に出席し、モルモン経や末日聖徒イエス・キリスト教会信仰箇条の講義、トーマス氏説教集など教会に関するパンフレット数種によって勉強いたしました。当時はこれらの資料以外に学ぶものはありませんでした。もちろん講義中、あるいは説教などには教義と聖約および高価なる真珠についての話のありましたことは覚えております。しかし、当時、これらの翻訳などは思いも及ばないことでした。

私は4年ほど求道者でしたが、1915年(大正4年)6月14日、17歳の時、当時第6代日本伝道部長であったジョセフ・H・ステンブソン長老によって東京の多摩川の清流でバプテスマを受け、またあんしめい按手礼によって聖霊たまものを授かりました。こうして私は末日聖徒イエス・キリスト教会の会員になったのです。感激は大きく喜びも非常なものでした。学生時代に私が教会の会員になることについて両親の承認もあり、大いに理解のあったことは、この上もない幸せでした。

それから父は北海道てしかが弟子屈に移りました。私は東京で学校を卒業し、鉄道省の職員として甲府市にある職場に就職しました。幸いにも当時、甲府支部がありましたので、各集会に出席したことは言うまでもありません。この甲府で、アロン神権の執事および教師に聖任されました。

1919年(大正8年)7月に大学で学ぶために再び上京しました。東京伝道本部に参りましてからは、なお一層熱心に教会の各集会に出席いたしました。

1920年(大正9年)2月には、祭司職に聖任されました。東京伝道本部にあっては、相互発達協会(MIA。現在の独身成人活動プログラム)の責任を与えられ、また集会を指導する機会をも与えられたりしてまことに大きな感激の時代でした。ステンブソン伝道部長の監督指導によって一生懸命その責任を果たしたつもりです。

ステンブソン長老が帰米して第7代日本伝道部長になられました方は、ロ

イド・O・アイビー長老で、大変かわいがっていただきました。アイビー長老によって1923年(大正12年)1月14日、待望の日本で最初のメルキゼデク神権の長老職に按手聖任されたのです。これによって将来が広々と開かれ、神様の祝福を得て、感謝の気持ちでいっぱいでした。

1922年(大正11年)ごろから私は南米のペルーへ留学する目的でスペイン語を習い始めました。1年後にはハワイ神殿で、結婚する予定にしておりましたところ、パスポートが下付される間際の1923年(大正12年)12月、父が急死し、学資の出所がなくなり、残念ながらペルー留学をあきらめることになりました。

そのころアメリカでは対日感情の悪化に拍車がかかり、日米間の情勢が悪く、アメリカからの宣教師たちが引き揚げるのではないかと聞いていました。そこで1924年(大正13年)、関東大震災の翌年ではありますが、教会としては大切な記念日である4月6日の安息日に、第8代日本伝道部長であられたヒルトン・A・ロバートソン長老夫妻により、日本伝道部が始まって閉鎖されるまで、私たちが最初で最後となった教会での結婚式を挙げました。相手は当時まだ求道者であったよしみずもとこ吉水源子、現在の奈良姉妹です。

同年8月、くしくもついに日本伝道部は閉鎖されました。ロバートソン伝道部長をはじめ、第二次世界大戦後に第10代日本伝道部長として来られるヴァイナル・G・マース長老ほか宣教師た

ちを見送り、横浜港でお別れしました。

顧みれば末日聖徒イエス・キリスト教会が1901年(明治34年)8月、ウイルフォード・ウッドラフ第4代大管長の時代、日本国布教のため十二使徒のひとりであったヒーバー・J・グラント長老(初代日本伝道部長。後の第7代大管長)ほか3人の宣教師(ルイズ・A・ケルチ、ホラス・S・エンサイン、アルマ・O・テイラー各長老)の来日以来、^{かんなん}艱難の中、日本国民に信仰を広め改宗に努めた24年間の伝道の歴史を閉じなければならなかったのですから、まことに遺憾^{しんげ}至極でありました。これは天父なる神様が私たちに与えられた大いなる試練だったと思います。

しかしながら、いつの年、いつの日にか再開されるであろうことを願わずにはおられません。日本伝道部閉鎖当時、私は鉄道省、後の日本国有鉄道本社に勤務しておりました。東京はもちろん札幌、大阪に出張や小旅行の都度、努めて集会に出席していましたので、日本中で私の知らない会員は皆無であったと言っても、あながち過言ではなかったと思います。なにぶん全地域の会員数はわずかに137人でした。

私は、ステンプソン第6代伝道部長の時代に東京伝道部で書記として奉仕していました。したがって全支部の会員名簿の整理、そのほか神権に関する聖任証明書の発行などをお手伝いしていた関係もあり、伝道部が閉鎖されると間もなく、その年の9月に独断でしたが、会員間の信仰と希望を強めるべく会員一同結集して日本伝道部の再開を懇願するために東京、大阪、および甲府、札幌に在住の全会員の方々に、会員の結束についての趣旨書を謄写版印刷で発行しました。

ついで私たち会員相互の連絡機関誌として、毎月「棕櫚」というパンフレットを発行し、もっぱら信仰と希望、愛の冷却を防いで参りましたが、なかなか思うに任せず、4年ほどで発行中止のやむなきに至りました。

しかし、東京におきましては、ささやかながら私の家で、毎日曜日、集会を開いておりました。当時集会に出席されましたおもな会員は、白石源吉兄弟、高木富五郎兄弟、中川工司兄弟、

望月謙太郎兄弟さらに当時珍しくもハワイに宣教師として召され、またハワイ神殿で奉仕をされた奈知江常姉妹でした。そのような集まりを通して大いに激励されたことを覚えています。おそらく大阪、甲府、札幌の会員の方々も何らかの方法で集会が持たれ、相互の交流を図っていたのではないかと思います。「棕櫚」発行中は各地の会員の活動状況を掲載していました。大阪では桂鶴一兄弟、札幌では小野謙次兄弟、熊谷たま乃姉妹が中心になって活躍していました。伝道部閉鎖後における会員相互の消息などについては、「棕櫚」を通じてソルトレークにある教会本部にことごとく報告しておりましたので、本部では私たちの動静を理解していたと思います。その証拠として1926年(大正15年)10月、ソルトレーク本部から特使として当時東京で開催された、^{はん}汎太平洋学術会議に出席のため来日された、当時プリガム・ヤング大学学長のS・ハリス博士によって、日本伝道の補助機関としての日本相互発達協会(MIA)が正式に開設されたことが挙げられます。私はその東京相互発達協会会長に按手任命されました。

残念ながら甲府にはできませんでした。大阪と札幌では組織されました。こうして私たちの小さな種が芽生え始めたのです。感激して神様に感謝^{きんか}を捧げたのは言うまでもありません。そして直ちに機関誌を通じて会員相互の親睦^{しんぼく}と連絡のための活動を進めることができました。東京はもちろん、大阪、札幌で集会が持たれ、日本での伝道が再開されることを大いに期待し、ソルトレークの本部との連絡も頻繁に行なわれました。これら仲介の労をとられたのは日本伝道部開設当時、4人のうち最年少の宣教師として来日し、後に第3代日本伝道部長としてモルモン経典の日本語翻訳初版発行者となったアルマ・O・テイラー長老と、初代日本伝道部長のヒーバー・J・グラント長老のおふたりでした。私は極めて小さな存在でありましたが、その後1930年(昭和5年)4月にヒーバー・J・グラント第7代大管長から日本支部管理長老に任命され、任命証がテイラー長老から送付されてきました。私にとって

は身に余る大きな責任を与えられたのです。

当時、国際情勢は激動し、これに災いされて私は日本国有鉄道職員として1934年(昭和9年)1月、南満州鉄道株式会社の広野に派遣されるをやむなくせられました。しかし、幸いにしてその翌年の1935年(昭和10年)7月、ブリガム・ヤング大学を卒業して日本に帰国された、札幌市出身の藤原武夫兄弟は専任宣教師として、また日本支部第2管理長老として任命され、日本での伝道に従事されたようです。しかし彼もその半ば、指を切り1年足らずして永眠されました。そのことは惜しみても余りあることでした。その後彼の後継者として日本の会員の中で任命された方の話を聞いていません。

私が満鉄職員として満州に在住してからも、会員間の連絡は恒例の新年のあいさつ状によって消息をかわらうじて維持しておりました。閉鎖当時の第8代日本伝道部長であったヒルトン・A・ロバートソン長老は、それから再度日本に來られ、伝道に尽くされて何人かの求道者にバプテスマを施された^と聞いています。

一時挫折の様子を呈していたのですが、私は再び宣教師が私たちのために派遣されることを信じ、かつ希望しておりました。しかしながら、戦争は拡大され、ついに全世界に及び、私たちにとって残念この上ない事件になったと言わざるを得ません。このころの私たち末日聖徒イエス・キリスト教会の会員は、はなはだしい苦難、暗黒時代の真ただ中であつたとしか、ほかにたとえようのない状態でした。

救いの道、そして昇栄して永遠の生命に至る道が閉ざされることは、シオンの息子、娘たちにとって最大の不幸事と言わざるを得ません。しかし、その非道な第二次世界大戦も1945年(昭和20年)8月15日に終戦を迎えました。満州から中国の天津^{テンシン}を経て東京に戻っていた私は、その年の10月30日、後に伝道部長を務めたエドワード・L・クリソルド長老がある新聞に出した、至急末日聖徒イエス・キリスト教会の会員と連絡を取りたい旨の3行の小さな広告を見たのです。



1950年ごろ、世田谷区下北沢で子供日曜学校に出席していた137人の子供と共に。



戦後伝道部が再開されるまでは、進駐軍の教会員が日本の教会員を支援した。当時進駐軍として駐留していたアドニー・Y・小松長老(左から2番目)、ラッセル・N・堀内兄弟(左から4番目)と奈良富士哉兄弟(右から4番目)と源子姉妹(右端)。1946年ごろ。

私は早速連絡先のホテルに行ってクリソルド氏と面会いたしました。彼は海軍中佐として日本に駐留していたのです。そこでいろいろ話した末、私がメルキゼデク神権の長老職の保有者であること、日本伝道部閉鎖後は日本支部管理長老であったことに関心を持たれ、日本在住会員の状況などにつき終始質問されました。それから数日後、明日ハワイに帰られるという前日、再度妻と共に会い、一日も早く日本伝道部が再開されるように懇願したところ、クリソルド中佐も極力努力することを約束して別れました。日本を去るに当たって、ラッセル・N・堀内兄弟(後の札幌伝道部長および東京神殿長)を紹介して一切を彼と相談の上、教会員を集めてこれから集会を持つよ

うにとおっしゃいました。

それで私は焼く野原になった東京で古くからの会員たちを捜して、ときには5人、また7人と少数でしたが、毎日曜日、集会を開いておりました。しかし、ピアノが使えて無料で集会のできる所を探すのは、なかなか困難なことでした。幸い私の親戚の所有地で適当な所があったので、しばらく借りていましたが、新宿近くの参宮橋では地理的に不便でしたので、その後六本木の幼稚園や池田山の個人のお宅の応接間など、場所も何回も変わりました。

また、援助者のひとり、アドニー・Y・小松長老も進駐軍の兵隊として在日中でした。現在七十人である小松長老は日本伝道部再開後、第14代伝道部長となりましたが、終戦当時は進駐軍

の情報機関におられたそうです。そのころ丸の内にある大手会社のビルの建物の中で進駐軍の方々の聖餐式が持たれており、小松長老のご尽力によって我々日本人も毎日曜日にこの聖餐式に出席させていただきました。私はその期間中、1946年(昭和21年)2月10日、進駐軍の聖餐式で管理者、司会者のサンダーソン大佐より主任長老に按手任命され、まことに身に余る光栄でした。こうして私がクリソルド海軍中佐に1945年(昭和20年)11月5日にお会いしてからの集会の詳細な記録は1947年(昭和22年)6月29日までソルトレーク本部への報告を続けながら、1948年(昭和23年)3月、日本伝道部が再開されるまで毎日曜日、集会を続けました。(なら・ふじや)

富山地方部富山支部



確かに主は祝福してくださいました

支部長 中村栄吉

富山の地に初めて教会幹部をお迎えした安息日、1991年12月22日は北陸の12月にしては珍しいくらいに晴天に恵まれ、とても気持ちの良い日となりました。

この良き日に、アジア北地域会長会会長のW・ユージン・ハンセン長老をお迎えしての教会堂の献堂式は、これまで富山の地で信仰をはぐくんできた私たち一人一人にとって忘れることのできない、とても価値あるすばらしいものとなりました。

私は、支部長という責任を通して3日間ハンセン長老の近くで奉仕したり、また、時間を共に過ごす機会が与えられました。その間、ハンセン長老からたくさんのすばらしい特質を学ばせていただいたことに心から感謝しています。会員や求道者一人一人に対して純粋な愛を示してくださり、神様と人々に対する感謝の気持ち、神権者として

神権を通しての祝福と奉仕、そして接する人に喜びと希望を与える人柄など、その行ないを通してたくさんの特質を私たちに教えてくださいました。

12月23日に行なわれた支部のクリスマス会では、イエス・キリストの特別な証人として最後に証をしてくださいました。私はその証を聞きながら、私たちは神様から特別に召された指導者に導かれているという感謝の気持ちと、また何とも言えぬ喜びに心が満たされ、涙を抑えることができませんでした。短い間でしたが、このような特別な機会が与えられたことに心から感謝しています。

思い起こせば7年前、家族5人でバプテスマを受けるまで、私は宗教というものに対してとても否定的で暗いイメージを持っていました。宗教は人生に望みを失った人や、この世で何も頼るものがなくなった人が求めるもので

あり、自分にはまったく関係のないものであると思いつけていました。ところが、母親が仕事を通して知り合ったとても魅力的な兄弟から、人生の目的と神様の計画について初めてお話を聞いた時、私のこれまでの宗教に対する考え方や思いは、まったく違っていることがわかりました。

神様が私たちに与えてくださった福音は、とても積極的な明るいものであり、自分に厳しく、大切なものを生涯をかけて守り通していくもの、そして希望と喜びに満ちあふれているものであると知りました。それから、ふたりの宣教師が私たち家族に紹介されました。福音を学んでいくほどに、若い時から神様の戒めを守って生活してきた宣教師の人柄にとても心を打たれました。そして「自分もそうありたい、自分もそのような人物になりたい」と心の中に変化があったことを思い出します。

「わが教会の兄弟諸君よ。私はあなたたちに聞くが、あなたたちは今日靈こんじちによって生れ神の子になっているか。

あなたたちは神の御姿^{みすがた}を自分の身に受けているか。あなたたちは今言ったような大きな改心をすでに感じているか。」(アルマ5:14)アルマが人民に述べたこの聖句のように自分も変わろうと思い、バプテスマを受けました。

バプテスマを受けてからは、富山支部の兄弟姉妹の励ましと助けと温かい見守りが、今日までの信仰生活の大きな支えとなってきました。特に、長老定員会の中にあつて、いつも積極的に奉仕の業に励んでおられる兄弟たちの姿は、私にとってとても勉強になりました。一人一人に心から感謝しています。

富山で伝道が始まって20年を迎えたと聞いています。20年というひとつの節目にあつて、富山がひとつの地方部として独立し、初めて教会幹部をお迎えして、教会堂の献堂式が行なわれたことをとてもうれしく感じています。

イテル書の中に「神は……ジェレドの兄弟が神を信ずる信仰の深いのを見て、ジェレドの兄弟にその指を見せずにおきたもうことはできなかつた」(イテル12:20)とあります。

私はこれらの特別な機会を通して、確かに神様は、信仰深く、信仰を行ないに表わした人々に祝福を与えてくださるお方であると証いたします。神様が私たちに与えてくださるすべてのことに感謝し、さらに大きな希望と決心を持って、教会員の皆さんと頑張っていきたいと思っています。(なかむら・えいきち)



中村ご家族

美しい教会堂を いただいて

藤井正一



昨年7月25日に完成した教会堂を見てみると、富山支部の変遷^{へんせん}と私の信仰生活とが思い起こされます。私が改宗したのは1976年8月27日で、当時教会は、富山駅から歩いて20分ぐらゐの所にありました。そこはビルの2階で、間口が5メートル、奥行8、9メートルほどの広さの一室を半分に使って礼拝堂とし、残ったスペースを3つの教室にしてありました。カーテン1枚で仕切った教室は、日曜学校のクラスなども隣の教師の声がこちらの教師の声よりよく聞こえるくらいでした。会員は15人くらいでしたが、ひとりふたりと増えてきて、何とか大きな建物がほしいと思う気持ちでいっぱいでした。

当時の教会堂の建築基準は会員数よりも地元負担金の支払い能力の方に重きが置かれていたので、建物の申請をするために、バザーを開いたり段ボールや空き瓶を集めたりしました。少ない人数ですることですから集まるお金は本当にわずかですが、そういった行為が早く建物を建てたいという会員の気持ちを高めました。建築基金の献金ももちろん皆一生懸命しました。

念願かなつて、富山駅からバス、徒歩合わせて約40分かかるといふ所ながらも、鉄骨造り2階建ての民家に引っ越すことができました。1978年8月30日でした。この場所には、現在では富山支部の新しい教会堂が建築されています。

1978年に移った建物は民家と言っても一般の家よりは大きく、部屋はたくさんありました。1階の部屋を開け放して礼拝堂として使用し、ほかにも1

階に2室、2階に3室、さらに大きな庭がありました。しかし続きの部屋を開け放しても礼拝堂として使用するにはやはり狭く、天井は低くて床は畳でした。

ここには5年近くいることになるのですが、ここへ来て2年目の1980年、富山支部のほかにも市内にもうひとつ伝道所が開設されました。私はそこを管理する責任を受け、私の家族4人と宣教師4人はその伝道所に出席することになり、まず建物を捜すことから始めました。伝道部長から40人が集えて駅から15分以内、家賃は5万円以内の物件を捜すようにと言われました。夜になると宣教師と一緒にその条件に合う建物がないか捜して歩きました。富山は田舎といつても家賃5万円が40人が集会できるような所はなかなか見つかりません。私が召しを受けた8月31日から、夕方明かりのついていない建物を目当てに、駅の周囲を捜しました。駅から15分以内の所ですと10日も捜せばほとんど回ってしまいます。何軒も訪ねましたが、どれも広さや家賃に問題がありました。

3週間近く捜しても伝道部長の出した条件の物件はどこにも見つかりませんでした。それどころか、今時そんな安い所があれば私の方が借りたいと笑われ、頭から断られました。最後に、今夜見つからなければもう捜すのはやめまふと伝道部長に電話をしようと思つて、出かけました。その晩、宣教師と9時近くまで捜しましたがやはり何もありません。宣教師と別れて帰り道、きょうこそ伝道部長にそんな所はないと言おうと決心して自転車を走らせていました。伝道部長は必ずあると言われたがやはりなかった。そう思いつつと見上げた小さなビルの2階の窓に、段ボールが押しつけられています。もしやこの2階は空いているのではないだろうか。そう思つて持ち主の酒屋に入つて聞いてみると、おばあさんに、自分はわからないが翌日息子が帰つてくればわかります、と言われました。

次の日宣教師に聞きに行つてもらいました。すると、そこも空いていましたが部屋は小さいので、さらに広い隣の建物の2階を紹介されました。条件

も伝道部長の言われたとおりの家賃で、広さも何とか40人ほどが集えるくらいのものでしたのです。こうして伝道所の集会所も見つかり、9月21日にそこで初めて集会を開くことができました。私はそのことがあって、どんな問題でも管理者の助言は自分たちが信仰を持って行動すれば必ずそのとおりになることを確信しました。そして自分の信仰が、途中であきらめるような情けないものであったことを思い知らされ、その後の信仰生活に大きな影響を受けました。

この伝道所には、1983年2月に閉鎖されるまで2年余り集いました。初めての1年間はひとりも改宗者がいませんでした。何度も失望を感じましたが、2年目に入ってからは何人もがバプテスマを受けました。当初50人を目標にして8人で始まった伝道所は、転入者もいましたがそれでも閉鎖される前は登録者はちょうど50人になっていました。集会も30人を超える日がときどきあり、出席者の多い日にはクラス分けどころか肩をすり合わせるようにして集会を開きました。自分たちの教会堂が欲しいと強く思いました。また富山支部と一緒にすることが決められて、しかも新しくもっと広い独立した教会の建物が与えられると聞いた時は、本当にうれしく思いました。

1983年2月20日、再び富山支部と、伝道所のあった場所からさほど遠くない所にあるビルに、一緒に集うことになりました。ビルへ入った時私たち富山支部はなんと恵まれているのだらうと思いました。信仰は物ではないとわかかっていても、美しい教会堂へ毎週集えるのは本当に素晴らしいことです。でもそこも日がたつにつれ問題が生じてきました。外回りの鉄骨はさびがひどく、駐車場も狭く、車で集う人はいつも困っていました。前はすぐ国道で、小さな子供たちには危ないこともありました。

今私たちにいただいているこの礼拝堂は、本当に美しくきれいです。これからは指導者が言われるように、その美しい建物の中に集う私たちが、建物に負けないようなきれいな心と清い思い、奉仕の心を持ち、親切な行ないを

しなければと思います。どんなにすばらしい建物の中に集っていても、人をねたんだりさげすんだり、いがみ合ったり、互いに協力をし合えなかったりしたら、そんな建物の美しさなど何の意味もありません。私の集っている富山支部にはとてもすばらしい人たちがいます。私はこのような人たちの中で福音を守っていけることを感謝しています。どれだけの助けや励ましをいただいているかわかりません。

今、富山支部は出席者が80人足らずですが、将来さらに人数が増えて今の集会所では入りきれませんと言える日が来るように、伝道に力を注ぎ、会員相互のきずなを強めていきたいと思っています。(ふじい・しょういち 地方部宣教師)

「怒るにおそく あるべきである」

金山陽子



今年、私が立てた目標は「家族を愛し大切にすること」です。私の家族は教会員ではありません。

私が教会に入ったのは約3年前です。そのころは教会の活動に出かけようとするたびに「また行くの?」とか「いい加減にしなさい」など散々言われました。また私は父とひどく口げんかをしたものです。父が何か言うたびに私は反発しました。それが悪いということに気づくのは、いつも口げんかの後です。その時の気分はもちろんとても嫌なものです。せっかく教会に入ったのに……。何とかしなければ……。と、そう思っていた時セミナーが始まり、参加することができました。そして、霊的目標や身体的目標を立てることになり、早速、私は霊的目標を「父と口げんかをしない」にしました。

やはり最初は困難でしたが、父に言い返そうとした時、自分の目標とセミナーで学んだ聖句を思い出しました。「人はすべて、聞くに早く、語るにおそく、怒るにおそくあるべきである。」(ヤコブの手紙1:19)そして、セミナーで学んだ言葉も思い出しました。もし、あらゆる口汚い言葉を慎むならば、次第に完成への道を歩むことができるのであると。

私は出かかった言葉を飲み、怒りを抑えて普通に父と話せるようになっていきました。

それから2年後、ある試練が訪れました。今度は母に、と言うより母が信じる宗教に対して、良い印象を持つことができませんでした。それは家庭にも被害を及ぼし、しかも経済的なものでした。もともと経済的な事情で進学がむずかしかった私はショックでした。

しかし、いつまでも怒ってはいられません。私は愛する友達から励まされ、聖典を読んだり、祈ったりして怒りを抑えることができるよう、また元のように母を愛せるよう努めました。

一度怒った相手を再び愛することはとてもむずかしいですし、愛についての聖句のように行動することも容易ではありませんでした。(Iコリント13:4-8;モロナイ7:45参照)ですが今では、母を元のように愛せるようになりました。コリント人への第一の手紙第10章13節にあるように、この世で耐えられないような試練に遭うことはないのです。求めれば本当に天父は助けをくださるし、またそれによって成長することができるのです。

初めは私が教会に行くのが気に入らなかつた両親でしたが、今では日曜日の朝「きょうは教会だったね。気をつけて」と見送ってくれるまでになりました。理解ある家族や友人、多くの兄弟姉妹に感謝しています。

天父の福音を学ぶとき、また、予言者の勧告に従うとき、確かに祝福を受けることを証します。(かなやま・ようこ 支部初等協会会長会第二副会長)

この本を 知っています

堀田紀子

今 私は主人と共に教会に集えることを心から神様に感謝申しあげたいと思います。

私が改宗したのは、1990年の10月21日でした。その時主人は私が教会員になることについては特別反対もしませんでした。喜んで賛成してくれたわけでもありませんでした。それでも私はバプテスマ会にだけは出席してほしかったのですが、雨が降れば出席する、というあいまいな返事でした。あいにくとその日は秋晴れに恵まれ、出席してもらうことはできませんでした。でも私にとってその日は永遠に忘れることのない大切な1日であり、神様の子供として歩み始める輝かしい日でもありました。この日を迎えることができたのもきっと神様の導きがあったからだと思っています。

私は同じ職場で働くある女性がクリスチャンであることは知っていましたが、モルモンと呼ばれる教会の方とは知りませんでした。ある日宣教師が求道者を教えるのを助けるために教会に行くというその姉妹について、一緒に教会に行きました。そこで、とてもやさしくて明るい姉妹宣教師の方に会い、とても心が和んだことを覚えています。それから数日して福音を学ぶようになったのですが、その時「堀田さんこれを読んでください」と、1冊の本を渡されました。私はそれを受け取った時、昔出会ったことのあるような、懐かしい気持ちになり、この本を知っていると、心の中で叫びました。家に帰って本棚を捜してみると、ありました。少し汚れてはいましたが、間違いなく「モルモン経」と書かれた本が、我が家の本棚の中でじっと読まれるのを待っていたのです。この本は十数年前に宣教師が訪問して手渡してくれたもので、受け取ったのは主人でした。その時私は主人に「お父さん、こんな訳のわからない本なんかにどうするの」と、ちょっと腹立たしい気持ちで言ったこと

を思い出しました。

次に約束をしていた時、その本を教会に持って行って宣教師にいきさつを話し、私たちがこの教会に導かれたことについて話し合いました。神様が教会で福音を聞くことができるようにこの本を私たち家族に与えてくださっていたこと、また私が教会員になるための準備をして、その機会を与えてくださったこと。そして私が改宗できるように、一生懸命教えてくださった姉妹宣教師、バプテスマや確認の儀式をしてくださった神権者や教会の兄弟姉妹の愛情。これらは今でもまるで昨日のことのように鮮明に覚えており、心から感謝しています。

それから10カ月後、主人が新築された富山支部の教会堂でバプテスマを受けけることになりました。絶対改宗はしないと書いていましたが、私たちが永遠の家族となるために決心をしたようです。それと言いますのも私たちには障害を持ったひとりの息子がいます。今は施設で生活しているその息子のためにも、私たちは永遠の家族となって3人一緒に暮らすことを目標に日々生活し、備えなくてはならないと思います。それができることを私たちに教え導いてくださる天父に頼り、希望を持って一日一日を大切に生きていけることに大なる感謝を捧げたいと思います。(ほりた・のりこ 地方部若い女性会会長第二副会長)

胸に満ちる 喜びと感謝

堀田和夫

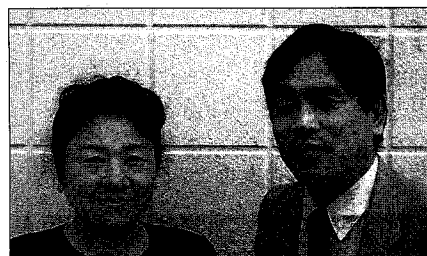
昨 年9月1日に改宗してからただ何となく日曜日、教会へ集っていたように思えます。しかし11月に日曜学校会長会第二副会長の召しを受け、週1回教会で開かれる会長会に出席し、その席でたびたび祈るようになり、初めのうちは言葉もぎこちなく簡単なものでしたが、最近は何の違和感もなく、上手ではないものの、自分なりに祈れるようになってきました。しかし困ったことですが、祈りをするたびに意味

もなく涙が出て仕様がなないのです。

最初は、なぜなのか全然わかりませんでした。年のせいでも涙もろくなったのかと悩みましたが、そうではなさそうでした。家で祈るときは出ないので。教会で祈るときに限られるのです。

私より先に改宗した妻は「お父さん、それは神様のみたまじゃないですか」と言います。そんなばかなと思いがら、ある日、神権者の方に話したところ、「堀田兄弟、それは神様のなさる業じゃないのですか、大変な証ですよ」と言ってくださいました。最初は何か信じられないような気持ちでしたが、これが神様が私に与えてくださるみたまなのかと、初めて知ることができました。自分も神様に守られて生活することができると、以来うれしく思っています。

まだ妻が教会に行つて宣教師から福音を学んでいたころ、宣教師が家をととき訪問してくれました。とても元気で明るい姉妹宣教師で、初めて会った時でも昔からの知り合いのような気持ちを抱いたのを覚えています。反対する理由が見つからないまま、妻の改宗を許したのです。バプテスマを受けて帰ってきた時も妻はともうれしそうに、生き生きとしていました。その時は私は自分の改宗などは考えもせず、父親が生きている間はまず仏教から離れることはあるまいと思っていました。でも妻が日曜日楽しそうに教会に行くことに対しては多分一度も不平を言わなかったと思います。そうこうしているうち何となく宣教師から教会の話聞くようになっていました。きょうこそ断わろうと思って教会へ出向きながら、次の約束をしている自分に腹が立ったものでした。今思い返すと、長老や神権者の方にも不快な思いをさせたりしたのではと心配になります。



堀田ご夫妻

去年、真新しい教会堂でバプテスマを受けました。その時、自分では考えられないような不思議なことが私の身に起こりました。

バプテスマを終え、神権者による^{あん}挨拶を受けた時から気持ちに変化がありました。それが現実のものとなったのは証を述べようとした時です。恥ずかしいことですが涙があふれ出て、言葉になりませんでした。こんなつもりじゃないと思えば思うほど、話すことができませんでした。それから妻と共に教会に集い、生活にも少し変化が見られるようになりました。共通の話題として聖典が私たちの前にあり、聖典を通していろいろと話し合います。また、私たちにはひとりの息子がおります。彼は出生の時、脳に酸素が送られず障害者として生を受けました。その息子が神様から授かった大切な子供であると学ぶことができ、今では何の心配もなく彼を見守っている自信のようなものも持て、深く感謝する気持ちでいっぱいです。神様が、弱い私たちを救うためにこの世にイエス・キリスト様を遣わされ、聖典を与えてくださったことに本当に感謝します。

現在私は教会の神権指導者によって導かれ、日々成長できることに感謝しています。これからも教会に集い、安息日を守り、聖典を学び、祈ることによって、人々を平安な気持ちに導き、家族と共に永遠に生活できる力を神から授けられることを心から願っています。(ほりた・かずお 支部日曜学校会長第二副会長)

「汝に経験を 与えんため」

浦上スーザン

「おめでたですね。」お医者さんの言葉を聞いて、私はびっくりしました。頭の中で「本当に？ やっとできた？ 今度、子育てが天のお父様から私への次のアサイメントか……」と考えました。

私たちは8年前に結婚しました。その間にずっと赤ちゃんが欲しかったの

ですが、恵まれませんでした。病院へ行ってもいつも「問題は別にないですよ」と言われました。じゃ、どうして、どうして、どうしてできないの……といつも思いました。その8年間は私にとって、とてもつらかったです。「まだですか？ 子供ぜんぜん欲しくないの？」と何回も聞かれました。妊娠している女性を見ると、いつも心の中では、あこがれと悲しみを感じました。

自分の子供ができなくても、みんなは神様の子だから養子でももらいましょう、とよく主人と相談をしました。しかしいつもタイミングが外れていたか何かの理由で、その計画を進めることができませんでした。

こうして8年を過ごしました。その間、良い日(別に赤ちゃんいなくても幸せですね)も、すごく落ち込んでいる日(もう日本はいやだ!)もありました。そのような中でいろいろな教会の責任を受けました。プライマリーの教師、副会長、会長もやりました。いつも責任を果たす時、ハワイ生まれの私は日本語と闘いました。レッスンを準備するために、ほとんど毎週泣きました。どれほどつらかったか、今でもうまく説明できません。「こんなにつらいのにどうして、どうして、どうして天のお父様は私にこれをやってほしいの？」と思っていました。その後地方部のプライマリーの会長会に召されて、2、3年後には地方部の若い女性の会長会に召されました。

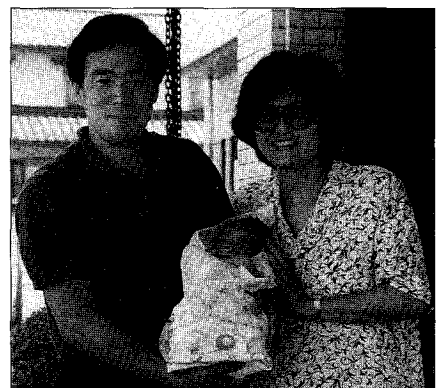
不思議なことでしたけれど、その責任を受けた時に、急にその「どうして、どうして、どうして」の質問の答えが少しわかりました。むずかしい日本語と異文化との闘いは私にとって準備の段階でした。もし前にこの経験がなければ、若い女性の責任をうまく果たすことができなかったでしょう。日本語を少し話し、読むことができるようになり、ほかの支部の人々に会い、教会のプログラムや組織をもっと深く理解できました。すべては、とてもすばらしい経験でした。北陸地方部の若い女性の責任を果たしていた時、天のお父様は私を使って、キャンプ活動を始めるよう望んでおられたと、目が覚めるように強く感じました。

2回目のキャンプは無事に終わって、若い女性の責任から解任になりました。私の次の使命は何でしょうかと考えました。ちょうど折っていたところに、先の答えを得ました。

時間はかかりましたが、私はこの経験から次のことを学びました。

天のお父様はご自分の予定表を持っておられます。天父の時間と私たちの時間は違います。私たちの望んでいること(たとえば、すぐ赤ちゃんが欲しいとか、今年中に結婚したいとか、この人をすぐに改宗したいなど)は天父の望んでいることと一緒にではないかもしれません。もしかするとその前に、私たちはしなければならぬこと(自分にしかできないこと)や、学ばなければならないことがあるかもしれません。天のお父様は私たち一人一人を愛しておられます。そして私たち一人一人にとって、一番いいことを知っておられます。試練を受ける時、苦しんでいる時でも、私たちはひとりではありません。天のお父様も一緒に苦しんでおられます。手を伸ばせば必ず乗り越える力が与えられます。

天のお父様は見ておられます。私たちがどうするかを。つらくても、正しい道を歩むかを。つらい経験は私たちの信仰と忍耐を強める機会です。それぞれのテストに受かるために、私たちはただ天のお父様を信じて、「この事を知れ、すなわちこれ皆汝に善からんため、汝に経験を与えんためのもなり」(教義と聖約122:7)と言われた主のみ言葉を覚えなければなりません。(うらかみ・すーざん 初等協会教師)



浦上ご家族

私の改宗

熊本地方部熊本支部
松山正博

人の改宗には、それぞれに神様の導きがあるように思います。個人個人、その人に合った主の導きがあるおかげで、その人は改宗できるのではないのでしょうか。

私の場合を振り返ってみると、やはり不思議なことが起こっています。教会に対してそれほどの関心がなかった中学時代、あるテレビ番組で、ソルトレークシティーのモルモン教会のことを知りました。酒もたばこもお茶もコーヒーも飲まないこの教会について、長く記憶に残っていました。

高校を卒業すると東京の会社に就職しました。しかし小さいころより発明家になることを夢みていた私は、どうしても電気の勉強がしたく、兵庫のある大手電機会社に転職しました。1970年1月のことです。このとき文通していたひとりの女性がいました。クリスチャンであることはわかっていましたが、自分自身がキリスト教に興味がなかったため、そのほかは何も知りませんでした。

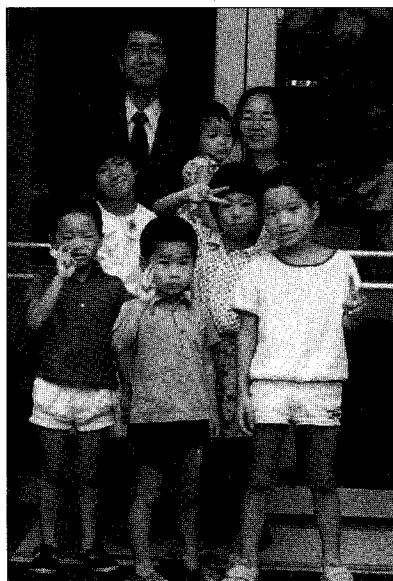
この年大阪で万国博覧会が開かれ、私は友人とふたりで仕事関連のパビリオンに入りました。そこを出た所にモルモン館がありました。ふたりでキリスト教館に行くところだったのですが、ちょうどすいていたのと、同じキリスト教だからと、私たちはモルモン館に入りました。

年が明けて1971年、発明家への道で挫折していた私は、「自分は夢を実現することができる」という自信を得たくて、第2の夢であった、2年間外国へ旅に出る決心をしました。

その計画を立てていた9月、神戸市内のある商店街でふたりの宣教師に会いました。長身の外人と小柄な日本人でした。それまでアパートへ来たほかの教会の伝道者の人たちはかたくなに断っていました、モルモン教会と

は不思議と縁があり、それほどかたくなな気持ちは起きませんでした。柔和で人懐っこそうな笑顔に、緊張もほぐれていたのかもしれない。また、ちょうど外国へ行く前であったので、キリスト教の勉強、英語の勉強、外人との接触と、個人的にも友達になりたいという思いもありました。

それから教会の教えを学び始めました。11月、私が大分に出張に行っている時、長老のうちのひとり西宮へ転任になっていました。それまで3回ほど会っていて、レッスンはまだ残っています。しかし内容はこれから行こうとしているヨーロッパのキリスト教の歴史とはあまり関係のない話ばかりでした。続けようか、これを機にやめようか、迷いました。このまま進めばいずれ教会に入ることになるのではないかとこの恐れがありました。私は酒、たばこを飲まない教会であることを知っていました。外国ではそれらを飲む機会もあるでしょう。私は宣教師と初めて会った時6回会うと約束していました。宣教師との約束を守って彼らに



松山ご家族

会いに行くか、私はその時、恐る恐る、自分から主に祈りました。私はその日1日よく考えました。そして「いかなるものであれ、約束は守らなければならない」という思いが強くなってきました。

次の日曜日、西宮支部に行きました。随分探しました。篠原通りにある神戸伝道本部と違ってここは普通の軒家でした。広い庭があり、その奥に大きいけれど古い建物がありました。勇気を出して庭の方の入り口から入ると、突然女性の声で「こんにちは」とあいさつする声が聞こえました。明るく、澄みきった、よく通る声でした。そちらの方を向くと若い女性が小さな子供と遊んでいました。今でもその時の情景を昨日のこのように思い浮かべることができます。しかし、残念ながらその人の顔も名前もわからないでいます。その時、私は思いました。

「ああ、これがクリスチャンだ。これがクリスチャンなんだ」と。それは私の不安を払いのけ、私は平安な気持ちで教会の玄関に向かうことができました。宣教師は非常に喜んでくれ、再び福音の勉強が始まりました。

12月末、帰省する前にバプテスマを受けるようチャレンジがありました。その時には教義と聖約を読んでしまっており、モルモン経は300ページほど読んだだけでしたが、証はありました。教会も信じていました。いつか教会に入ることも嫌ではありませんでした。ただ翌年3月には外国に出発します。戒めを守れるか不安でした。

宣教師は強く証しました。

「松山兄弟、あなたがバプテスマを受けて外国へ行かれるなら必ず主の守りがあり、多くの祝福が受けられることを証します。」それはいつまでも、きょうに至るまでも頭に残っています。

1972年1月、再び神戸に戻った私のアパートに1通の手紙が来ていました。文通していた女性から、一切の交際の断わりの手紙でした。そして、その中に次の一文がありました。

「暇があったら、一度教会にいらしてみたらどうでしょうか。真実の神を知ることができたら幸いに思います。」

この手紙を読んだとき、私の揺れ動

いていた気持ちは決まりました。私は
真実の神を知っている。それなのにな
ぜ、バプテスマを延ばす必要があるう
か。

私のバプテスマは1月23日日曜日の
朝と決まりました。少し残った福音の
勉強と面接があったためです。その日、
朝から雪が降っていました。六甲山か
らの冷たい風が吹いてフロントに入る
まで寒さに震えていました。バプテスマ
フロントは外にあり、水が入れてあり
ました。ところが不思議と、バプテスマ
を受ける時には、水の冷たさを感じ
ませんでした。むしろ温かくさえ感
じました。握手礼あんしゆれいの時は体が熱くほて

ってかっかしたほどでした。何とも言
えない平安と喜び、これで良かったん
だという思いが全身を包みました。

宣教師の約束どおり、外国での2年
間、私は主に守られ、導かれ多くの祝
福を受けました。無事日本へ帰ること
ができました。その後伝道へ出て神殿
結婚をし、現在6人の子供たちに恵ま
れ、すばらしい妻と共に幸福な家庭を
持つことができています。

この教会が確かに真実のイエス・キ
リストの教会であり、主が生きて私た
ちを導いておられることを心より証い
たします。(まつやま・まさひろ 支
部日曜学校会長兼会長)

「どこの教会に行けばいいんだろう。
どこが真実の教会なんだろう」と。

そのような迷いの中、ある日曜日の
朝、私は目覚めてから家を出て、何の
当てもなく一度も通ったことのない道
を歩き、気がつくところの教会の前に立
っていました。その日はステーク部大
会のために教会の中にはだれもいませ
んでした。仕方なく聖書を読むために
図書館に行ったところ、聖書と一緒に
モルモン経が置いてあり、これは何だ
ろうと思ひながら読んでみると、とて
も不思議な思いがし、心の中が温かく
なりました。

次の週再びこの教会に行ったところ、
宣教師の人はびっくりしながらも温か
く迎え入れ、教会の話をしてしてくれま
した。宣教師から福音を学ぶ時そこにみ
たまがあり、喜びがありました。図書
館で読んだモルモン経についての証を
聞き、ジョセフ・スミスの最初の示現
を教えられた時、私はとてもうれしく
なりました。一つ一つの事柄が神から
来たものだともみたまを通して確信を得、
長年私が求めていた答えはこれだと知
り、バプテスマを受けることを決意し
ました。17歳の時でした。

家族の反対のためすぐには受けるこ
とができず、6カ月の間、できる限り
の正しいことを家庭で行なえるように
努力しました。また当時、私のホーム
ティーチャーだった監督が家に来て、
バプテスマについて両親に説明をして
くれました。両親は、監督の人柄や態
度を見て心を和らげ、それから約2カ
月後に私がバプテスマの儀式を受ける
ことに同意してくれました。

この期間聖典や教会の書物を読み、
学び、多くのことを発見し理解する最
高のチャンスを得ました。またそれは
バプテスマを受けてから14年間続い
ています。私は知っています。モルモン
経が神のみ言葉であり、ジョセフ・ス
ミスが神の力たまたものと賜により翻訳したこ
とを。エズラ・タフト・ベンソン大管長
が神から召された予言者でありジョセ
フ・スミスを通して回復されたすべて
の権能の鍵かぎを継承していることを。主
が生きておられ、この教会が真実の教
会であることを私は知っています。
(きず・ゆきお ステーク部書記)

真理を求めて

大阪北ステーク部豊中第3ワード部

木津幸男



物が心が付いたところから、私は機会
あるたびに次のことを考えていま
した。「何のために私は生きている
んだろう?」「死んだら人はどうなる
んだろう。一体どこへ行くんだら
う?」私はそのふたつの疑問の答えを
知るために両親から学校の先生、親類
の人々などあらゆる人々に聞きました
が、だれからも私の求めている完全な
答えを得ることはできませんでした。
私の疑問を真剣に考えてくれる人は
いないばかりか、逆に非難される有様
でした。私はある時途方に暮れてしま
い、半ばその答えを得るのをあきらめ
ていました。しかし心の中では常に答
えを、正しい答えを得たいと望んで
いました。

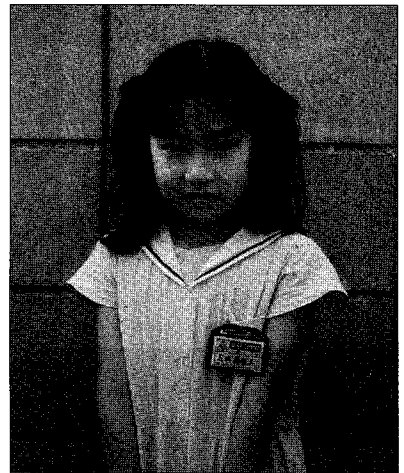
中学を卒業した後、家が貧しいため、
また家族を養い助けるために、私は社
会に出て働きました。収入の9割以上
を両親に渡し、手元に残ったわずかな
お金では遊ぶこともできず、つらい試
しの中で私の心にある疑問の答えを得
たいという望みはさらに強くなりました。
毎日様々な教えの中からその答えを
求めていました。そのような思いで
過ごしていたある日、テレビのスイ
ッチを入れた時のことでした。ちょうど
その時、キリスト教の番組の中で牧師
がキリストの証を、そして「放蕩息
子」のたとえ話をしていました。私は
番組を見ながら心を強く動かされ、何
か心の中を強い力で貫かれるような、
今まで味わったことのないほどの感動
を得ました。なぜならそのメッセージ
がまるで私自身に向かって語られて
いるかのように思えたからです。その
番組の最後で「明日は日曜日です。お
近くの教会へ行ってください」と画面
に書いてあり、私は「教会に行こう」と
決心しました。しかし問題がひとつあ
りました。近くに多くの教会や教派が
あったために私の心は迷い悩みまし
た。

かみさまのたすけ

沖縄那覇ステーキ部沖縄ワード部
玉城絵梨子

わたしは、がっこうで たいいく
わ の じかんに とびばこを し
ています。わたしは とびばこが こ
わくて、どきどきして とべませんで
した。でも、みんなのように とべる
ようになりたかったので、いっしょ
うけんめい おいのりをして、いっ
しょうけんめい とぶ れんしゅうを
しました。すると いつのまにか と
べるようになりまして。きっと、か
みさまが たすけてくれたんだなと
おもいました。いままでにも たすけ
てくださったのは、かみさまだと わ
かりました。わたしは あいする か
ぞくと かみさまが いて しあわせ

です。
でも せかいじゅうには、まずしく
て こまっている 人が いることを
せんせいから ききました。それで
わたしと みんなで しあわせぼきん
をしています。しあわせぼきんと
いうのは しあわせを こまっている
人たちと わかちあうために やって
いる ものです。このまえ、ひいおば
あさんの 3かいきの ときに、ふく
ろに おこめを 入れる おてつだい
をしました。それで おこづかいを
もらいました。その おかねを しあ
わせぼきんの はこに 入れました。
そのとき、もうすぐ こまっている



人たちが、しあわせに なれると お
もいました。

かみさまは、わたしたちが がんば
る ときに たすけてくれる ことを
あかします。きっと かみさまが、
こまっている 人たちを たすけてく
れる ことを しんじて います。わ
たしは かみさまが だいすきです。
(たまき・えりこ CTRクラス)

アジア北地域管理本部増築工事 鉄入れ式行なわれる

末日聖徒イエス・キリスト教会アジ
ア北地域管理本部増築工事を開始する
に当たり、去る7月7日、アジア北地
域会長会会長W・ユージン・ハンセン
長老管理の下に鉄入れ式が行なわれた。

増築部分は、鉄骨造り5階建て、建築
面積162.64平方メートル、延床面積
647.85平方メートルの建物。所在地は
東京都港区南麻布5-10-29。竣工
は1993年5月末の予定である。



鉄入れ式にて——W・ユージン・ハンセン長老(左か
ら2番目)、サム・K・島袋長老(右から2番目)、北
村正隆地域監督(右端)

ろう者大会の お知らせ

月日：1992年10月10日(土)、11日(日)
場所：東京神殿、横浜ステーキ部セン
ター
集合：10月10日 午前11時30分
東京神殿別館
宿泊：会員宅(横浜ステーキ部、町田
ステーキ部)

プログラム

10月10日(体育の日)

12:30 神殿参入
エンゲウメント(手話つき)
死者のための身代わりのバプ
テスマ(手話つき)
午後 親睦会

10月11日(日曜日)

午前 一般大会
午後 セミナー(分科会)

7月に召された専任宣教師

第157期生 13人



後列左から1-8, 前列左から9-13

〈名前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 長嶺育子	沖縄那覇S/小禄W	札幌伝道部
2. 沼野知華	広島S/徳山W	札幌伝道部
3. 神谷昌乃	名古屋S/岡崎W	東京北伝道部
4. 竹内敬子	神戸S/明石W	大阪伝道部
5. 河原そのみ	町田S/町田第1W	神戸伝道部
6. 葛原紀子	神戸S/西宮W	福岡伝道部
7. 赤松美和	東京東S/牛久W	福岡伝道部
8. 中村和子	神戸S/西宮W	福岡伝道部
9. 遠藤謙	横浜S/横浜第2W	大阪伝道部
10. 小沢裕一	札幌S/札幌東W	東京南伝道部
11. 山田晃久	福井D/福井第1B	東京北伝道部
12. 日坂昇	名古屋S/名東南W	東京北伝道部
13. 中野泰範	京都南S/大津W	札幌伝道部

S: スターキ部, D: 地方部, W: ワード部, B: 支部

新刊ビデオ
のお知らせ

●永遠の家族

VHS ビデオカセット

ITEM 53411 300 約30分 1,200円

あなたにとって一番の思い出は何ですか。あなたの家族との思い出にはどのようなものがありますか。幸福の源である家族を世の中の悪から守るにはどうすればよいのでしょうか。幸せな家庭を築き、家族が永遠に一緒にいることはできるのでしょうか。

これらの問いに対して、人はどのようにして答えを得るのだろうか。このビデオには、何組かの家族が、自らの体験を基にどのようにしてその答えを見いだしたかが描かれている。

お知らせ

役員の内命

1992年6月19日から7月15日までに管理本部会員統計記録課に通知のあった役員の内命(敬称略)

- 大阪スターキ部
新スターキ部長: 長浜俊生^{としお}
(前任者: 浜田博之)
- 名古屋スターキ部春日井支部
新支部長: 岡村茂
(前任者: 石川賢一)
- 大阪伝道部奈良地方部名張支部
支部長: 伊藤猛
(前任者: 戸村正信)

新ユニット

- 名古屋スターキ部中津川支部
支部長: 水野茂
(6月21日, 春日井支部より分割)
- 大阪伝道部奈良地方部
地方部長: 吹田栄二
(6月28日, 大阪スターキ部より分割)